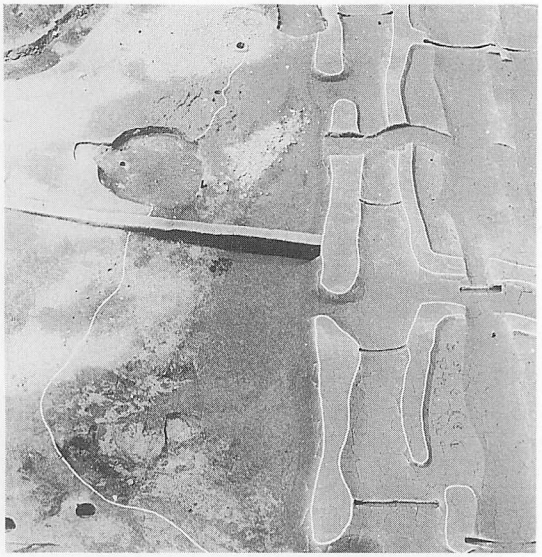
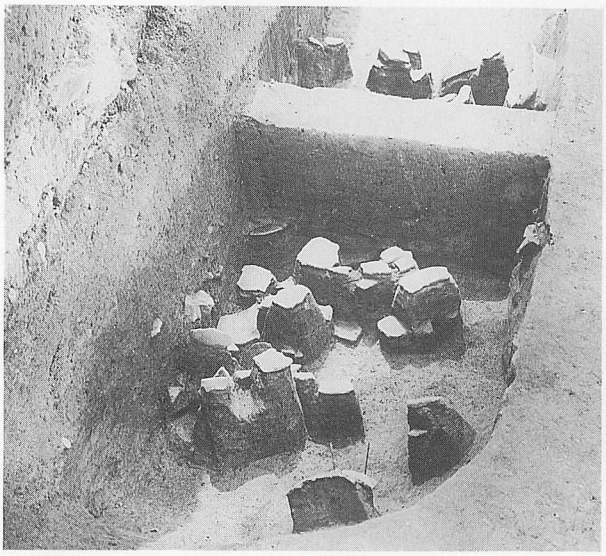
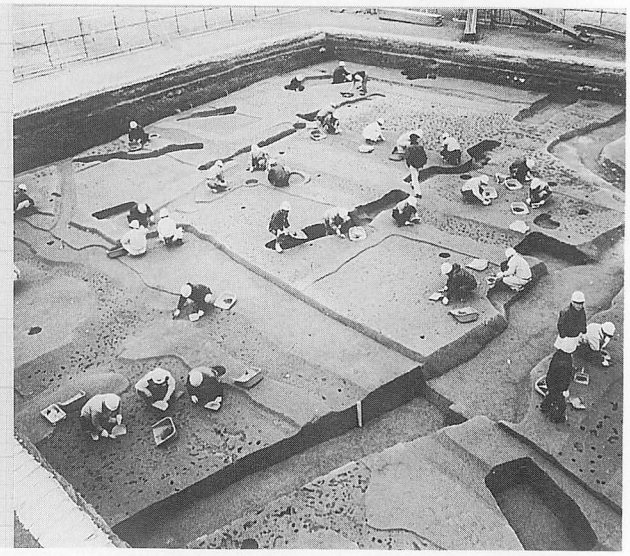
① A区SD-208灰ブロック検出状況



② A区SD-301貯水施設部分（東から）



③ A区SK-402遺物出土状況（東から）



④ A区作業風景（北西から）

写真26　99802調査（文京遺跡18次）A区出土遺構

東西約20mにわたり、砂礫層の一部を断ち割り、トレンチ調査を行った所、磨滅をほとんど受けていない状況で弥生土器がまとまって出土した。しかし、掘削面が、グラウンド面からすでに３m以上に達しており、安全面を考え途中でやむなく調査を終了した。

（田崎・三吉）

③微高地上の遺構

一方、調査区の南半部分の微高地上と谷部への落ち際のⅣ層上面では、掘立柱建物（SB-573～583）、溝（SD-405）、土壙（SK-401～404・406～408）、柱穴および小穴（SP-409・455～462・464～469・471～484・486～572・584～600）を検出した（図52、写真25-②）。

出土遺物と埋土から、掘立柱建物でもSB-479・575・581は古代から中世、他は弥生時代～古墳時代の高床式倉庫と考えられる。弥生時代から古墳時代の掘立柱建物は、ほぼ東西を向き計画的に配置されている状況が窺える。

また、SK-401～403・404は弥生時代中期後葉、SK-406・407は中世の土壙である。SK-402では、弥生時代中期後葉～後期初頭の土器などが廃棄された状態で出土した（写真26-③）。掘立柱建物以外に、土壙は少なく、竪穴式住居跡もみられないことから、本調査区周辺は弥生時代の文京遺跡の大集落の中でも、高床式倉庫が集まった区域であったと考えられる。

［掘立柱建物］

SB-573　DS-41区で検出したSP-455・457では、直径22cmほどの立柱痕跡を確認でき、南側の調査区外へのびる梁間1間(1.9m)の掘立柱建物を推定する。SP-455の柱の底には扁平な花崗岩が敷かれている。

SB-574　DS-41区で検出したSP-456・462では、直径18～20cmほどの立柱痕跡を確認できた。南側の調査区外へのびる梁間1間(2.6m)の掘立柱建物と考えられる。

SB-575　SP-464・459・460・461・465から構成される梁間2間(4.65m)×桁行2間以上(3.4m以上)の掘立柱建物である。梁間の中央に位置するSP-459は、他と比べてかなり浅い。SP-464の柱痕跡は直径28cm、SP-461では24cmを測るが、他の柱穴では柱痕跡は確認できていない。SP-461・464・465の底面には扁平な花崗岩が敷かれていた。SP-464からは古墳時代後期の須恵器、SP-460からは古代～中世の土師器の破片が出土。

SB-576　DS～DU-41区で確認した掘立柱建物。SP-467・471・472・566から構成される梁間1間以上(3.1m以上)×桁行4間＋α(6.35m)と推定される比較的大型の建物である。いずれも柱痕跡は検出されなかったが、SP-472では底面に扁平な花崗岩が敷かれていた。

SB-577　DU・DV-41区に位置する。SP-474・476・478・479・480・571から構成される梁間1間(2.2～2.5m)×桁行2間(5.45m)の掘立柱建物である。SB-576の柱穴であるSP-472、SK-401を切る。

SB-578　DV・DW-41区で、直径17cm前後の柱痕跡を持つSP-483・484を検出した。北側の調査区外に延びる掘立柱建物と考えられる。

SB-579　DW・DX-42・43区にあるSP-498・526・562・568から構成される梁間1間(2.35～2.4)×桁行1間(4.7から4.85m)の掘立柱建物である。SP-526・562・568では、直径20cm前後の柱痕跡を確認した。柱は掘方に比べて大きい。

SB-580　DW・DX-42・43区にあるSP-513・514・515・516から構成される梁間1間(2.3m)×桁行1間(5.3～5.5m)掘立柱建物である。SP-513・515・516では直径17～24cmの柱痕跡、SP-514では柱の抜き跡が確認できた。

SB-581　DY-43区に位置する梁間1間(2.45m)×桁行1間(3.85m)の掘立柱建物で、SP-533・534・535・536から構成される。SP-534では柱の抜き取り痕跡を確認できたが、他では柱穴痕跡は検出できていない。

SB-582　DY-41・42区のSP-511・547・570では、直径20cm前後の柱痕跡が確認された。これらから構成される掘立柱建物を考える。

SB-583　DY-41・42区。SP-550・556でも、直径22cm前後の柱痕跡が確認された。これらから構成される掘立柱建物を考える。

［溝］

SD-405　DY-42・43区で、ほぼ南北に延びる幅30～50cmほどの溝である。埋土は暗黒褐色シルトに暗黄灰色砂質土、黄褐色砂質シルトが多く混じる。弥生土器の細片が出土。

［土壙］

SK-401　DV-41区に位置する不整な短楕円形の土壙である。SK-408とSP-571に切られる。埋土は黒褐色砂質土を主とする。

SK-402　DX-41区に位置する。埋土は黒褐色砂質土で、弥生時代中期後葉の甕・壷・高坏の破片が出土。中世の土師器椀の口縁部と底部破片が見られるが、東側でSK-402を切る小穴の遺物が取り上げの際に混じり込んだものである。

SK-403　DZ-41区に位置する。SP-570を切る。SP-587との切り合いは不明。埋土上部～中位から弥生時代中期後葉と考えられる甕と壷の胴部破片が出土した。

SK-404　DZ-42区に位置する。埋土は黒褐色砂質シルトを主とする。埋土下半から、弥生時代中期後葉の鉢の口縁部破片、その他胴部破片が出土。

SK-406　DV-42区の谷部への移行部分で、底面が平坦な落ち込みを検出した。Ⅳ層に類似するにぶい黄褐色砂質土が埋土で、中世の土師器椀の胴部破片、糸切り底の土師器皿底部破片などが出土している。

SK-407　DV-42区に位置する細長い不整楕円形の土壙である。灰黄褐色～にぶい黄褐色砂質土を埋土とし、中世の土師器椀の高台部や口縁部破片、糸切り底の土師器皿が出土した。

SK-408　DV-41区のSK-401を掘り下げ中に確認した土壙である。SK-401を切る。灰黄褐色砂質土を主とする埋土で、土壙下部から弥生時代中期後葉の甕の口縁部や胴部の破片が出土した。

［その他の遺構］

微高地上で検出した小穴の中で、SP-455～457・

461・462・464・474・476～478・483・484・487・492・495～497・513～516・526・528・541・545・547・549～551・556・557・562・567・568・570・571・591・592では、立柱あるいは杭の痕跡を確認した。また、立柱あるいは杭の痕跡をもつSP-455・456・461・462・474・478・484および、SP-459・465・471・472・473・479からは、弥生時代中期後葉の土器片が出土している。また、SP-464からは、弥生土器とともに、8世紀前半の須恵器坏の口縁部片が出土。SP-460では中世の土師器椀・皿・土鍋、SP-480では中世の糸切り底の土師器皿、SP-487では中世の土師器椀の胴部片が、弥生土器とともに出土した。（三吉・田崎）

(2)B区の調査

調査区は共同溝設置に伴うものである。南北に約40m、東西に約6mと細長く設定された。グラウンド造成土を中心としたⅠ層、近現代の水田層であるⅡ層除去後、旧グラウンド下約60cmで遺構面を確認している。遺構の時期は、弥生時代から近世までにおよび、大半の遺構は、調査区の北端と南端に集中する（図53、写真27-①）。

出土した遺構としては、竪穴式住居跡（SC-605・606・670・687・689・713・729・730・738・741）、掘立柱建物（SB-740）、溝（SD-601～604・610・627・650）、土壙（SK-647・663・666・675・684・690・695・697・705・710・711・725・732・733・735）、そして柱穴および小穴（SP-607～609・611～626・628～646・648・649・651～662・664・665・667・668・671～674・676～688・696・698～704・706～709・712・714～716・718～724・726～728・731・734・736）がある。

この中で、SD-601・SD-602は、中世～近世の遺物が出土するが、中世の段階から水田の幹線水路として機能していた可能性が考えられる。古墳時代の遺構としては、調査区の北端で古墳時代後期の東西方向の溝を3条確認した。溝の底面からは須恵器・土師器が出土している。弥生時代の遺構は、調査区の北端で方形の竪穴式住居を3棟、調査区の南側で弥生時代中期後葉～後期初頭にかけての掘立柱建物2棟、竪穴式住居6棟、大型土壙3基が確認できた（図54、写真27-②）。特に調査区南側では、遺構が幾重にも切り合っていた。集落の密集域にあたる。

［竪穴式住居跡］

SC-605　DH-39区。SD-604に切られ、SP-608を切る。ほとんどを攪乱溝で破壊されているが、方形プランの竪穴式住居跡と考えられる。埋土は、やや灰色みをおびた茶褐色シルトで、小礫・粗砂はあまり混じらない。出土遺物なし。床面でSP-609を検出したが、SP-608の埋土は茶褐色シルトで、SC-605の埋土とはまったく異なるので、SC-605に付設された遺構とは考えなかった。

SC-606　DH-38・39区でSP-623と切り合う。細長い隅丸長方形の平面プランをもつ。床面を精査し、柱痕跡をもつ小穴を確認したが、配置関係からSC-606の柱穴とできるものは明確に把握できなかった。やや茶色みをおびた黒褐色砂質シルトの埋土である。

SC-670　DH・DI-31・32区に位置し、SP-656・SP-673・SP-687に切られ、SK-695・SK-710を切る。2本柱構造の4m×3mを測る長方形プランの竪穴式住居跡である（写真28-②）。西半分を中心として、埋土中から弥生土器・石器・炭化物がまとまって出土しており、住居として廃絶後に投棄が行われたものと考えられる。なお、有溝石錘が1点出土している。

SC-689　DI・DJ-31区で検出した。SP-688・SK-693に切られ、SK-690・SC-738を切る。平面プランは方形または長方形を持つと考えられる。柱構造は不明である。埋土は暗褐色シルトを主体としながら灰白色砂質土が混じる。親指先大の円礫を含むが、砂礫はほとんど含まない。

SC-713　DI-31区に位置し、一部は調査区南側の文京遺跡14次調査地へと続く。SK-705に切られ、SC-689・SC-729・SC-730を切る。2本柱構造の平面プランの長方形住居跡と考えられる。埋土は暗褐色砂質土を主体としながら、黄褐色砂質土、灰黄褐色砂質土の小指先大のブロックが大量に混じり、床面付近で炭化物が出土している。さらに親指先大の円礫の砕片を多く含む。

SC-729　DI-31区に位置する。SC-670・SC-713に切られ、SC-730を切る。平面プラン並びに柱構造は不明である。砂礫混じりの暗褐色砂質土の埋土で、明黄褐色の直径1cm大の丸い塊が含まれる。

SC-730　DI-31区で、SC-670・SK-690・SC-713・SK-725・SC-729・SK-739に切られ、SC-738を切る竪穴式住居跡を確認できた。しかし、平面形状ならびに柱構造は不明である。埋土は、暗褐色砂質土で、直径2～3cmの砂礫や小指先大の円礫が混じる。小指先大の炭化物片が出土している。

SC-738　DI・DJ-31区に位置する。SC-689・SK

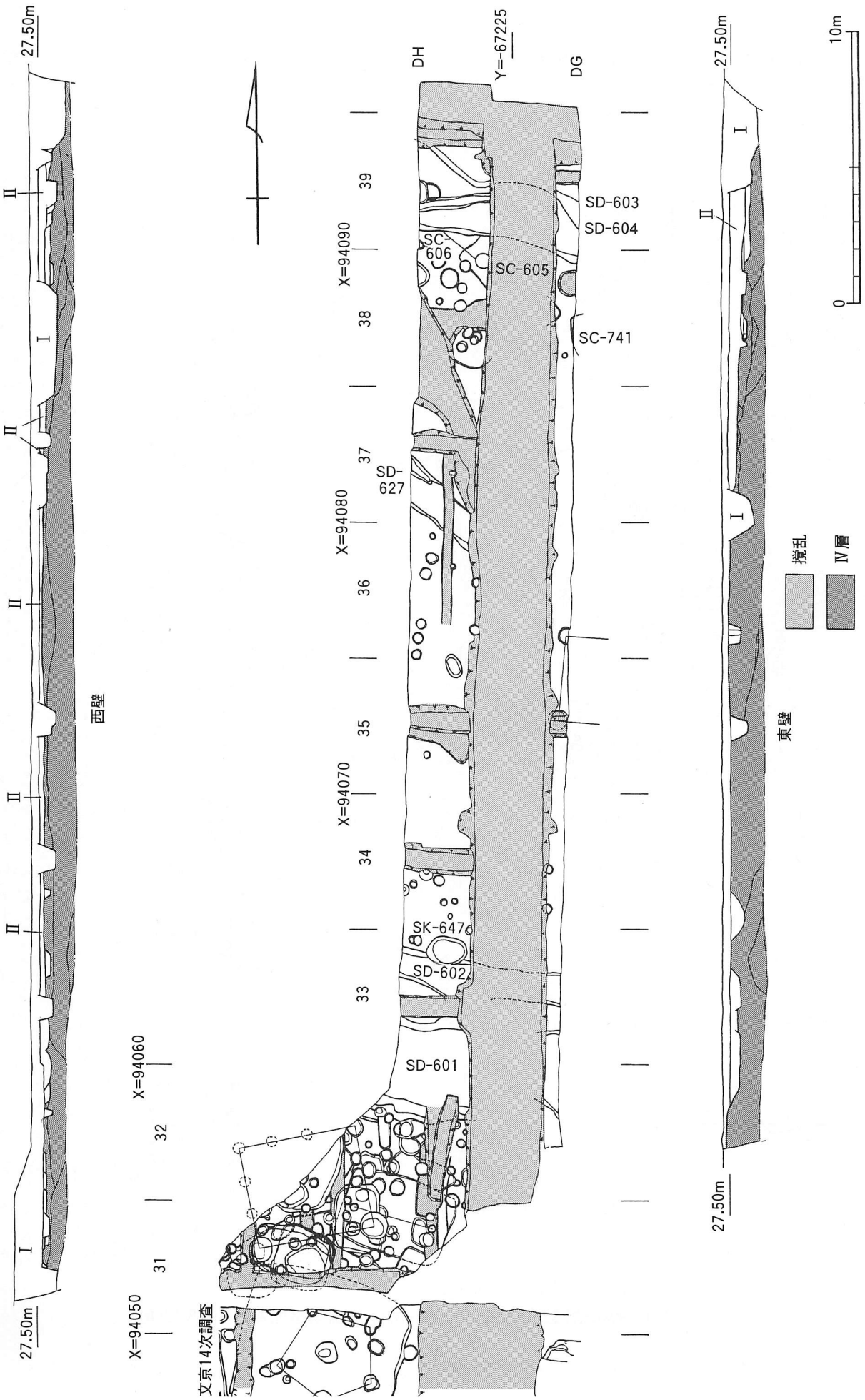


図53　99802調査（文京遺跡18次）B区遺構配置図および調査区土層断面図（縮尺1/200）

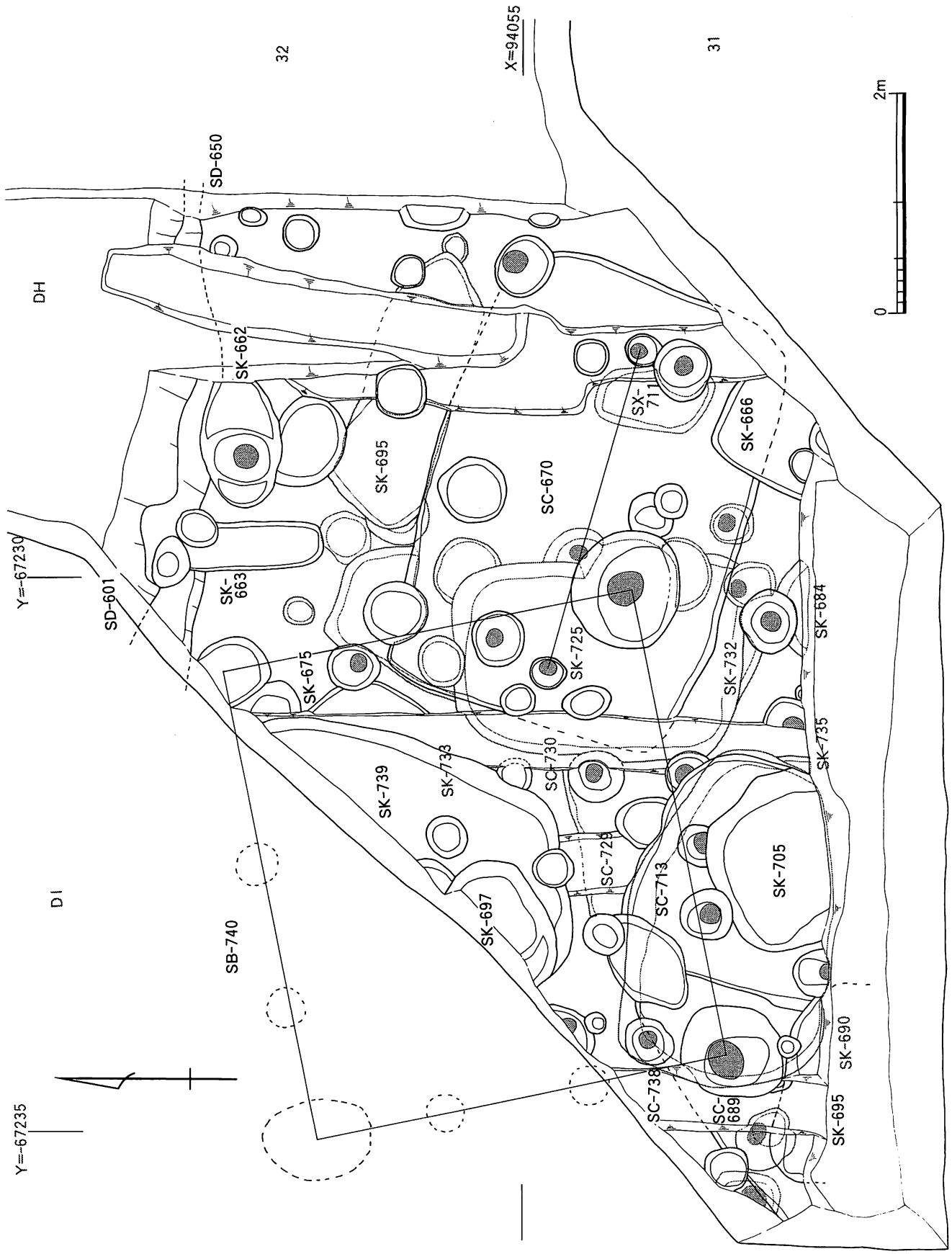
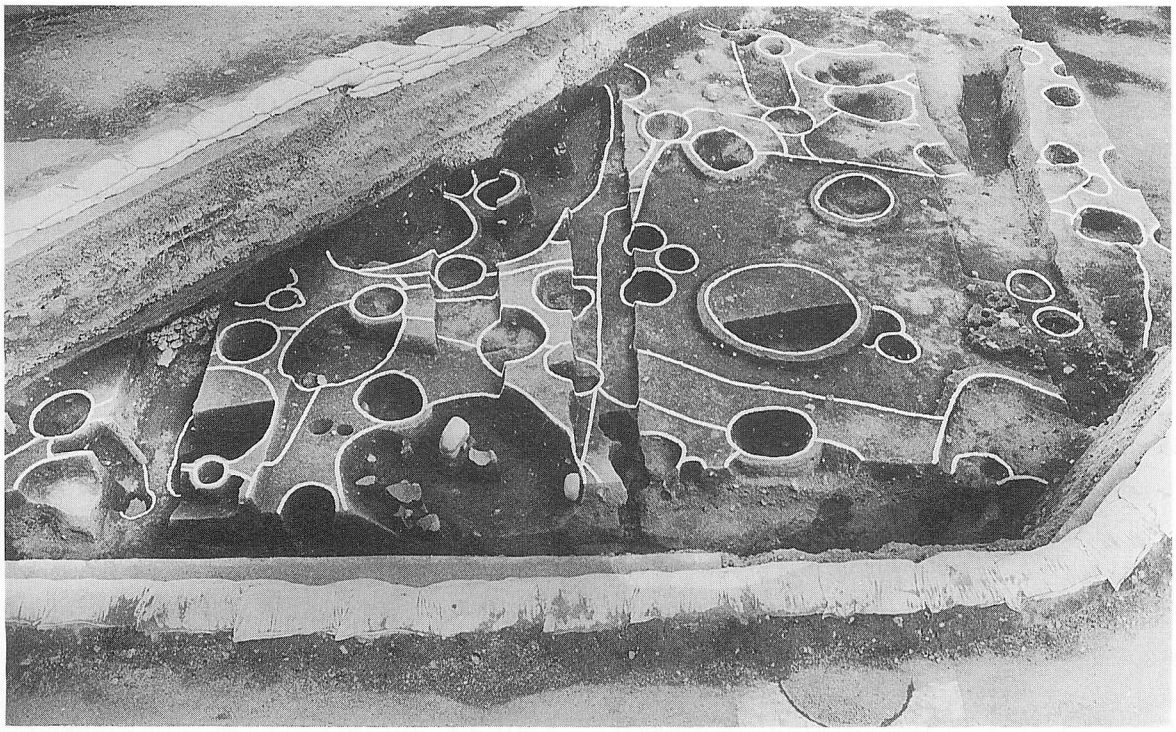


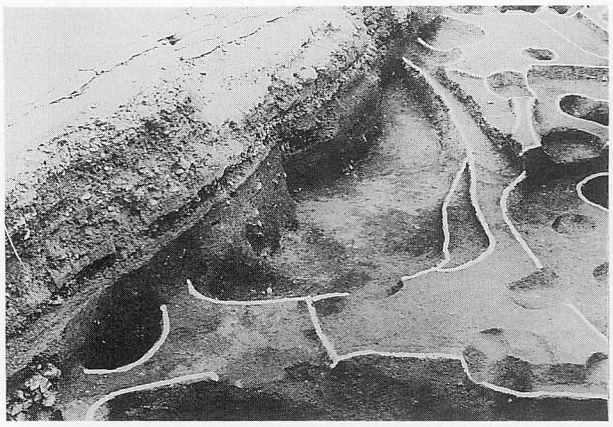
図54　99802調査（文京遺跡18次）B区南端部遺構配置図（縮尺1/50）

① B区全景（北西から）



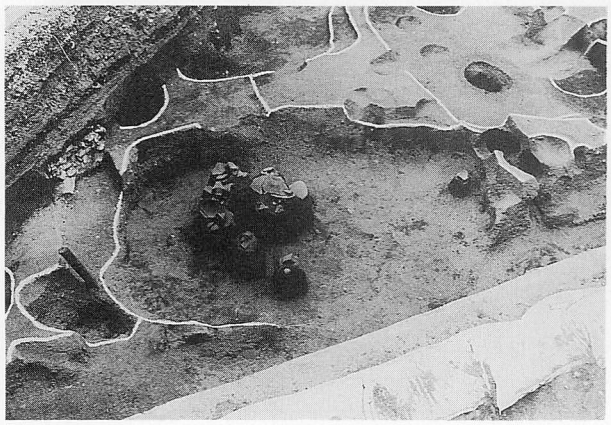
② B区南端の遺構群（南から）

写真27　99802調査（文京遺跡18次）B区全景および南端部の遺構群

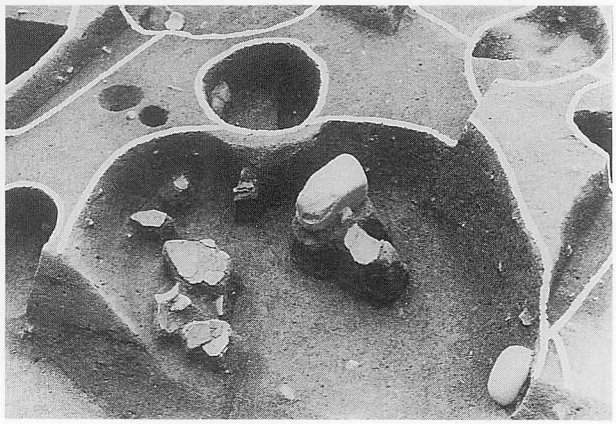


① B区SK-739

② B区SC-670



③ B区SK-690



④ B区SK-705

写真28　99802調査（文京遺跡18次）B区出土遺構

-690・SC-729・SC730・SP-734に切られる。調査区の西壁沿いで確認したもので、平面形状については不明。埋土は黒褐色砂質土で、明黄褐色砂質土及び灰白色のレンズ状の塊が混じる。床面で立柱痕のあるSP-703を検出できたが、住居跡に伴うか否かは不明。

SC-741　DG-38区の調査区壁際で確認した方形プランの竪穴式住居跡と考えられる遺構である。

［掘立柱建物］

SB-740　DH・DI-31・32区に位置する３×３間の掘立柱建物である。建物主軸は真北から西に大きくふれる。柱間は約1.3mを測る。建物角の柱穴は、直径１m前後の掘り方であるが、柱痕跡の直径は約30cmを測る。それ以外の柱穴は、直径50cm前後の掘り方で、直径20cm前後の立柱痕を持ち、補助的な柱穴と想定される。しかし、すべての柱穴に関して丁寧な土層観察を行ったものの、掘り方埋土を強固に突き固めたような状況は見られず、文京遺跡３・７次調査で発見されている大型掘立柱建物群に見られるような重厚な構造物とは異なる。SP-689・SC670・SK-725を切る。

［溝］

SD-601　DH-32・33区で検出した東西方向にのびる幅３mを測る溝である。中世～近世の遺物が出土。

SD-602　DG・DH-33区で検出した。SD-601の北側で東西方向にのび、幅１mを測る。中世～近世の遺物が出土。SK-647と切り合う。

SD-603　DG・DH-39区で小さな角礫や粗砂を含むやや灰色みをおびた茶褐色砂質シルト質土が広がっており、南側の茶褐色～黒褐色砂質シルトの上部にのっていることを攪乱溝の壁面で確認した。その範囲をSD-603埋土上部として掘り下げたところ、SD-604より北側にSD-603下部を確認した。SD-603下部からは須恵器を含む土器小片が点々と出土。

SD-604　DG・DH-38・39区で検出した東西に延びる溝である。SC-605を切る。埋土はやや灰色みをおびた茶褐色シルトで、小礫・粗砂を含むが、SD-603ほどは多くない。底面付近から須恵器・土師器小片が点々

と出土した。

SD-610　DH-39区のSD-604の下底面で確認した。幅35～45cmを測る。

SD-627　DH-36・37区に位置する近世の溝。

SD-650　DH-32区で、SD-601の南側の肩部で部分的に確認できた。DG-32区では、SD-601の断面でも確認できないので、SD-601に切られた東西方向の溝と考える。SK-622を切る。

［土壙］

SK-647　DH-33区でSD-602と切り合う不整な楕円形の土壙である。

SK-663　DH-32区で検出した浅い舟底状の土壙である。SP-664・665に切られる。埋土は黒褐色砂質土で、下部にはにぶい黄褐色砂質土が少量混じる。炭化物片が比較的多く出土した。

SK-666　DH-31区に位置し、埋土は黒褐色砂質土で、直径２～５cmの花崗岩円礫や、小指の先大のにぶい黄褐色砂質土の塊が点々と混じる。

SK-675　DI-32区に位置する。SP-671と切り合う。埋土は、黒褐色砂質土で、拳大の花崗岩の円礫が多く混じる。炭化物の小片が少量出土した。

SK-684　DH・DI-31区で、SP-683と切り合う。埋土は黒褐色砂質土で、直径４～５cm大の花崗岩の円礫が点々と混じる。

SK-690　DI-31区に位置する長方形土壙である。長辺３m、短辺３mを測る。SC-687・SK-689・SK-693・SK-705・SC-713に切られ、SC-730・SC-738・SK-735を切る（写真28-③）。埋土上部は暗褐色砂質シルトを主体として、焼土や炭の塊が混じる。下部は暗褐色砂質土で、明黄褐色・灰白色砂質土の小指先大～拳大の塊が大量に混じる。また、砂礫を多く含む。

SK-695　DH-32区に位置し、SC-670・SP-695に切られる。長辺2.2m、幅80cmを測る歪な長方形の平面形をもつ。黒褐色砂質土の埋土で、にぶい黄褐色砂質土の不整形の大きな塊が多く混じる。

SK-697　DI-31・32区に位置する。SP-708・SK-739を切る。埋土は黒褐色砂質シルトで、土層観察では立柱痕は見られないが、柱穴の可能性を残す。

SK-705　DI-31区で検出した一辺1.5mを測る方形または長方形土壙である（写真28-④）。SP-690・SP-713・SP-728を切り、SP-681に切られる。埋土は、灰褐色砂質土を主体としながら、黄褐色や明黄褐色、灰黄褐色の砂質土の小指の先大の塊が大量に混じる。小指の先大の不定形の炭化物片が出土。

SK-710　DH・DI-32区に位置する。SC-670に切られ、SP-673と切り合う。黒褐色砂質シルトの埋土で、明黄褐色の直径２～３mmの丸い小塊が少量混じる。また、花崗岩が崩れ小指の先大の破片となったものが多く含まれる。

SX-711　DH-31区のIII層上層で、弥生土器・石器・炭化物がまとまって約１m四方に広がる状況が観察できた。その段階では遺構を確認できなかったが、III層を掘り下げIV層上面で、長辺１m、幅0.5mの隅丸長方形の土壙を検出した。III層部分で出土した弥生土器・石器・炭化物は、この土壙に伴うものと考えられる。SP-714に切られる。

SK-725　DH・DI-31・32区で確認した長辺2.5m、短辺1.7mの長方形土壙である。SC-729・SC730を切り、SC-670に切られる。SK-732とも切り合うが、先後関係は不明。埋土の上半部は黒褐色砂質シルト。下半部には親指先～拳大のにぶい黄褐色砂質土の小塊が多く混じる。

SK-732　DI-31区で検出した。SK-725に切られると思われるが、判然としない。埋土は黒褐色砂質土で、炭化物片が点々と混じる。

SK-733　DI-31・32区のSC-730の床面で確認した。SC-729・730、SK-739に切られる。埋土は黒褐色砂質土で、砂性強い。掘り方が判然とせず、浅い土壙であり、上層のSC-730の造成土部の可能性も残す。

SK-735　DI-31区に位置する。SK-690に切られる。平面形は不明。埋土は暗褐色砂質土と黄褐色の不定形の塊が混ざり合う。直径１～３mmの砂礫や小石が含まれる。

SK-739　DI-31・32区に位置する。SP-674・696・708、SK-697に切られる。検出状況から、一辺３m前後の胴張りの土壙と考える（写真28-①）。埋土は、灰褐色砂質土を主体としながら、黄褐色や明黄褐色の砂質土の小指先大の塊が大量に混じる。小指先大の不定形の炭化物片が出土している。　（三吉）

3　調査のまとめ

今次調査の成果を調査区ごとにまとめたい。

まず、A区の調査では、文京遺跡における土地開発、並びに弥生時代における集落配置の観点で注目すべき成果をえることができた。

文京遺跡では、これまで古代以降における遺跡の存

在は想定されていたものの、その実態は殆どつかめていなかった。しかし、今回の調査結果から、文京遺跡が縄文時代～古墳時代だけではなく、鎌倉時代までの長期間営まれ続けた遺跡であることが明らかとなった。

土地開発の実体をみると、11・12世紀までは、東西に延びる幅60～80mの谷状の窪地に水田を設け、谷状の窪地の落ち際に沿って幹線水路や溜め池を造り効率的な水配りを行っている。そして、枝水路を設けて細かな用水管理を行っている。さらに、水田自身も畔で小さく区画されている。これは、1筆の水田内の土壌をある程度一定にし、水がかりを良くするためのものであると同時に、人手をかけずに水田域を広げることができることなどの理由によるものと考えられる。しかし、13世紀段階では、今回の調査区内には幹線水路はみられず、当時の幹線水路と考えられるものは、今回の調査地点から南へ35mほど離れた15次調査7トレンチで確認された幅5mの溝である。このことは、12世紀以前の水田と比べて、幅40mほどの土地が水田化されたことになり、12世紀から13世紀の段階に、谷状の窪地をこえて、微高地上の水田開発が行われたことを想定させるものであり、文京遺跡周辺における土地開発の歴史の一端を知りうる好資料と言える。

弥生時代に関しては、東西に延びる谷状の窪地を検出したことにより、中期後葉～後期初頭の集落の北限を確定することができた。また、高床倉庫の可能性が高い掘立柱建物群が計画的に集中して営まれており、大集落全体の中で当調査区周辺が貯蔵庫域の機能を担っていたことを想定することが可能となった。

B区においては、中世～近世にかけての水路を2条確認できたことにより、A区における成果とあわせて、グラウンド周辺では、古代から近世に至るまで連綿と水田が営まれていたことが想定できるようになった。

また、弥生時代に関しては、少なくともB区の南端部までは、住居跡群の密集した状況が続いていることを確認できた。調査区の南端部以北では、弥生時代の遺構が稀薄であった。しかし、調査区の北端で弥生時代の方形竪穴式住居を2棟確認できている。さらに調査区全体にわたって基本層序のIII層が見られないこと、さらに周辺の地形の中で、当調査区が高所に位置することを考慮するならば、中世～近世以降の開発によって遺構の大半が削平されたとも考えられる。以上のことから、弥生時代中期後葉から後期初頭における住居跡群の密集状況は、さらに北側に広がっていたものと考えられ、文京遺跡における集落配置のあり方をより詳細に把握することができた。　　（三吉）

99803　工学部本館等事務室改修機械設備工事に伴う調査

調査地点　松山市文京町3番
　　城北団地
調査面積　0.7m²
調査期間　1998年12月14日
調査の種別　立会調査
調査担当　吉田広
調査補助　宮崎直栄
依頼文書　平成10年12月1日付
　　施設課長発　事務連絡

1　調査にいたる経緯

工学部本館事務室改修機械設備工事に伴って、集水枡の新設が計画された。計画位置は本館建物際で、この本館建設時に既に余掘りが及んでいる可能性が極めて高いが、そうでないとするなら、既存の配管箇所の下に、遺跡の残存することも十分予想された。本館建設時の余掘り範囲を確認する意図も含んで、工事に伴い立会調査を実施することとした。

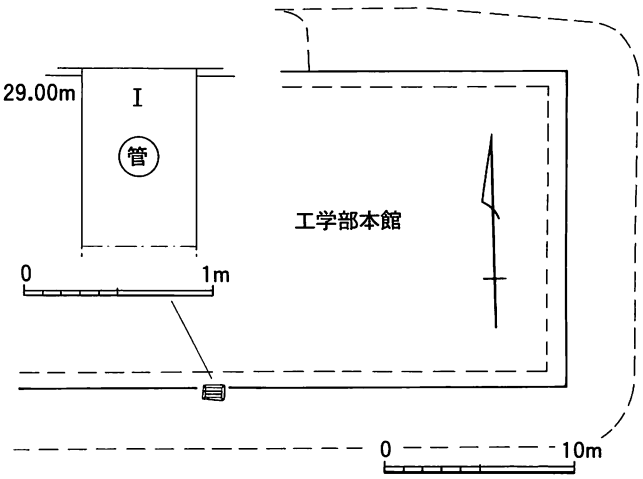


図55　99803調査地点位置図および土層柱状図
（縮尺1/400、1/40）

2　調査の記録

現地表下約40cmで、既設の汚水管（径20cm）が現れ、更に地表下約90cmまで掘り下げたが、すべて表土層であった。しかも表土層内での切り合い関係は認められず、本調査区は既設汚水管の埋設に伴う掘り方内と判断できた。本館建設時の余掘り範囲を確認することはできなかったが、既設汚水管の掘り方によって、現本館壁から1.5mの範囲は、現地表下90cmまで攪乱が及んでいることが明らかとなった。

3　調査後の対応

以後の慎重工事を依頼して調査を終えた。（吉田）

99804　遺伝子実験施設新営その他工事に伴う試掘調査

調査地点　松山市樽味3丁目5番7号
　　樽味団地
調査面積　21.8㎡
調査期間　1999年1月28・29日
調査の種別　試掘調査
調査担当　吉田広
調査補助　宮崎直栄
依頼文書　平成11年1月21日付
　　施設課長発　事務連絡

1　調査にいたる経緯

愛媛大学遺伝子実験施設の新営が計画され、これに伴う諸配管部分も含め、計画位置及び掘削深度が提示された。しかし、本体部分に既に汚水処理施設・排水処理施設があり、これらによってどの程度攪乱が及んでいるかどうか自体不明な部分が多い。また、配管部分に関しても、樽味団地内北側は比較的豊富な調査所見によって、埋蔵文化財への対応を判断できるものの、南半部は既往の調査自体が少なく、計画深度での埋蔵文化財への影響を図りかねる状況であった。したがって、これらの判断材料を得ることを目的として、試掘調査を実施することとした。

2　調査の記録

計画建物本体に関しての、既設建物による攪乱・遺跡の存在を探るトレンチを3ヶ所、新設の排水管敷設に関わるトレンチを5ヶ所、そして南北方向の新設電気・上水管に関わるトレンチを1ヶ所、計9ヶ所にトレンチを設定した（図56）。

(1) 1トレンチ（図57-②、写真29-①）

排水管西端の集水枡部分は既に調査（調査番号：99507）しているため、そこから約35mの地点にトレンチを設定した。表土層に続いて、地表下70cmまでII層が続く。当初、II層下でIII層ないしIV層が検出できるものと想定していたが、以下では約50cmにおよぶ流路内堆積が認められた。上に砂質土のa層とb層、下に粘質土のc層があり、c層には微細な土器片を含む。この下は固くしまった砂礫層のV層である。本来のIII・IV層のあるべき層序に流路内堆積が代わるわけである。

(2) 2トレンチ（図57-③、写真29-②）

1トレンチが当初の予想に反した結果となったため、予定になかった2トレンチを設定した。位置は1トレンチの東約15m、既設の排水管がないとされた地点である。結果、ここでもやはりII層の下は流路内堆積であった。地表下約75cmからa・b層に続いてc層が厚く堆積し、地表下135cm以下のc層の掘削は中止した。なお、地表下約80cmで東西方向に管路が埋設されている。

(3) 3トレンチ（図57-④、写真29-③）

2トレンチから約30m東に位置する。既設排水管は道路中央部にあり、新規計画位置の南側は、既設排水管埋設時の攪乱は及んでいないことがまず確認できた。下層の状況はやはりここでも流路内堆積である。地表下約55cm以下にa・b層に続いて、地表下約90～130cmの厚さでc層が堆積し、その下に更に粘性の強い黒褐色のd層が堆積する。d層は一見III層に見えるが、層序が異なり、おそらくV層の直上ないしは流路内堆積の一部と見られ、本来のIII層の流路内の一部への再堆積層と見ることができる。流路内の溜まりのような堆積である。なおこのトレンチのc層より、10世紀代と推定される高台付きの土師器椀（図58）が出土している。

(4) 4トレンチ（図57-⑤、写真29-④）

東西道路と南北道路の交差点から10m程西の、舗装道路南脇に4トレンチを設定した。ここでは地表下約70cmで厚さ15cmほどのc層を、その下にはIV層を検出することができた。c層を土壌化しきっていないIII層と捉

えることも可能であるが、ここでは流路内堆積の最外縁部の堆積と見られる。

(5) 5 トレンチ（図57-⑨、写真29-⑤）

5トレンチは、本体部分の南部の状況の確認と、汚水処理施設建設時の攪乱の範囲を特定するために設定した。まず、その余掘り攪乱幅は、建物壁から140cmの範囲を確定できた。残存部の状況は、地表下25cm～65cmの間にII層があり、その直下でV層を検出した。ただしその検出位置は、このトレンチの南東隅部で、北西よりは流路内堆積となり、f•g層が堆積し、一部d層の溜まりも認められる。つまり、このトレンチ部で東北東―西南西方向の流路の肩部を検出したことになる。

(6) 6 トレンチ（図57-⑩、写真29-⑥）

6トレンチも、既設の排水処理施設による攪乱の範囲と、計画建物本体北東部分の土層を確認するために設定した。現地表下約55cmでIV層を検出した。ただこの地点のIV層は、砂質が強く粘性が低いため、確認のため断ち割ったところ、厚さ約20cmで、V層が現れた。また、攪乱については、排水処理施設の北側に付属する鉄骨機械の土間基礎は、せいぜい地表下40cmまでで、遺物包含層にまでは及んでいない。施設本体の攪乱は、建物から160cmまでと見られるが、やや幅が当初想定より多くあり、建物脇の管路敷設の可能性も考えられる。なお、II-④層より磨石（図59）が出土している。

(7) 7 トレンチ（図57-⑥、写真30-①）

東西排水管の東端の状況を確認するため、排水処理施設北東コーナーの北辺りの道路に設定した。地表下50cmでII層、75cmでIV層となりIV層直上には、II層が埋める南北方向の溝を検出した。なお、この溝の東西でややIV層の状況が異なる。

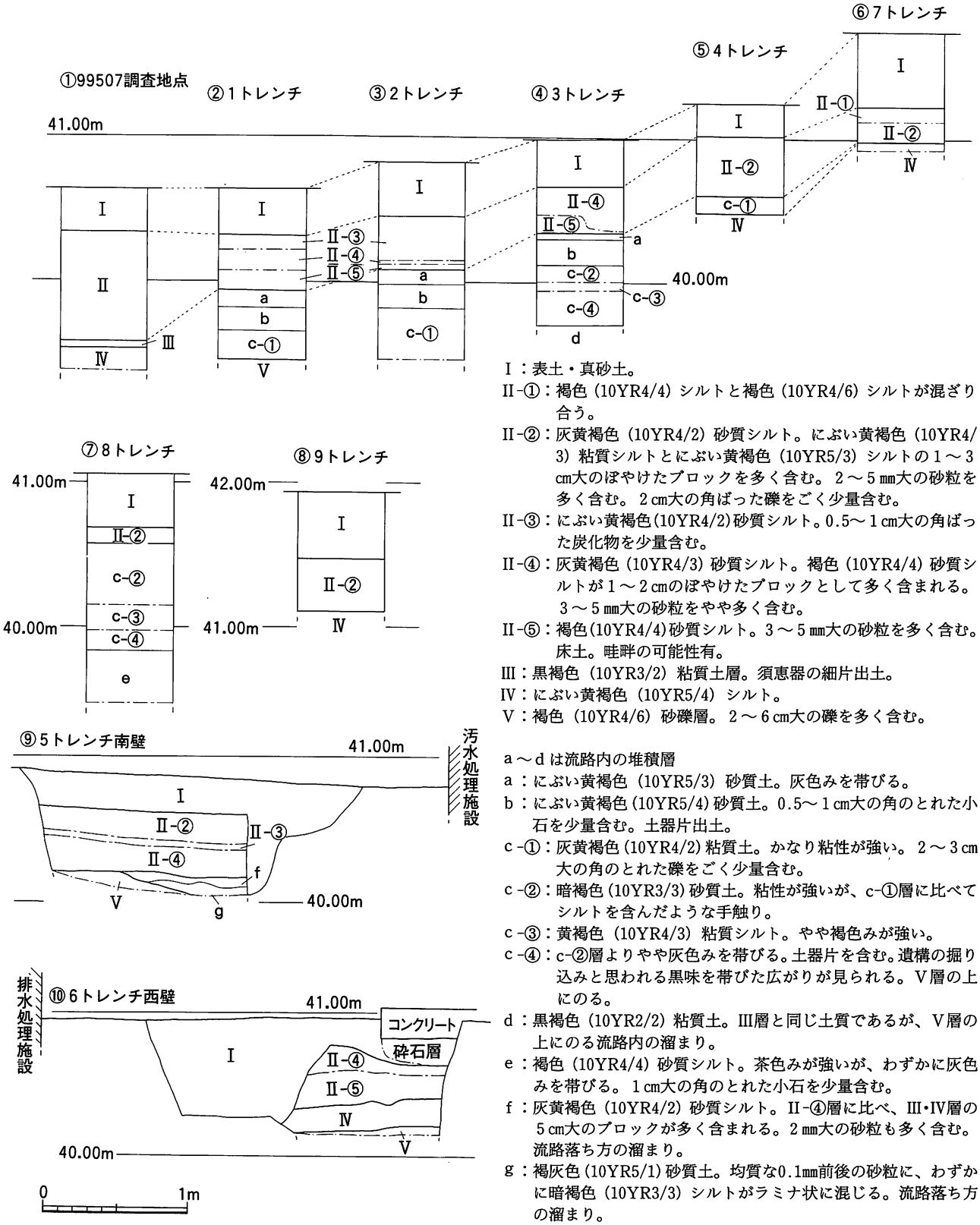
(8) 8 トレンチ（図57-⑦、写真30-②）

新営建物本体の南西部分の状況確認のため設置したトレンチである。表土層は厚さ40cm程で、その下に10cm程のII層が認められた以下は、流路内の堆積である。しかもa•b層は見られず、やや粘性の高いc層が約75cm堆積し、その下層に砂質の強いe層が続く。地表下160cmまで掘削したが、e層の堆積が続く。

(9) 9 トレンチ（図57-⑧、写真30-③）

南北道路下に埋設予定の管路部分の状況把握のため、道路交差点から北に約30mの道路脇に設定した。現地表が道路からやや高いため、道路面を基準に記述しよう。道路面から35cmまでが表土、70cmまでがII層。

図56　99804調査1～9トレンチ位置図（縮尺1/800）

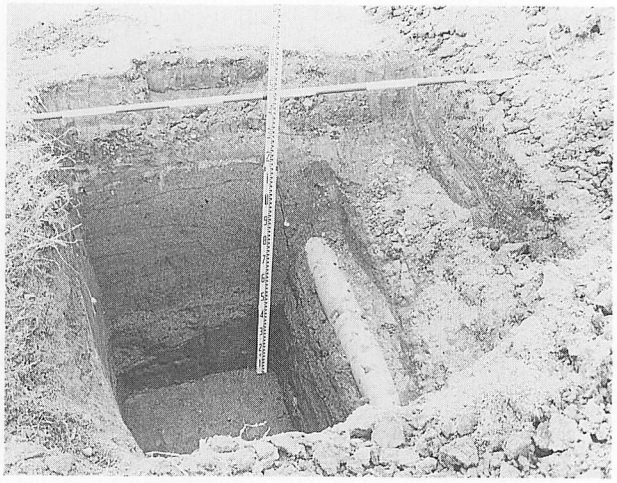


I：表土・真砂土。
II-①：褐色（10YR4/4）シルトと褐色（10YR4/6）シルトが混ざり合う。
II-②：灰黄褐色（10YR4/2）砂質シルト。にぶい黄褐色（10YR4/3）粘質シルトとにぶい黄褐色（10YR5/3）シルトの1～3cm大のぼやけたブロックを多く含む。2～5mm大の砂粒を多く含む。2cm大の角ばった礫をごく少量含む。
II-③：にぶい黄褐色(10YR4/2)砂質シルト。0.5～1cm大の角ばった炭化物を少量含む。
II-④：灰黄褐色（10YR4/3）砂質シルト。褐色（10YR4/4）砂質シルトが1～2cmのぼやけたブロックとして多く含まれる。3～5mm大の砂粒をやや多く含む。
II-⑤：褐色(10YR4/4)砂質シルト。3～5mm大の砂粒を多く含む。床土。畦畔の可能性有。
III：黒褐色（10YR3/2）粘質土層。須恵器の細片出土。
IV：にぶい黄褐色（10YR5/4）シルト。
V：褐色（10YR4/6）砂礫層。2～6cm大の礫を多く含む。

a～dは流路内の堆積層
a：にぶい黄褐色（10YR5/3）砂質土。灰色みを帯びる。
b：にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土。0.5～1cm大の角のとれた小石を少量含む。土器片出土。
c-①：灰黄褐色(10YR4/2)粘質土。かなり粘性が強い。2～3cm大の角のとれた礫をごく少量含む。
c-②：暗褐色(10YR3/3)砂質土。粘性が強いが、c-①層に比べてシルトを含んだような手触り。
c-③：黄褐色（10YR4/3）粘質シルト。やや褐色みが強い。
c-④：c-②層よりやや灰色みを帯びる。土器片を含む。遺構の掘り込みと思われる黒味を帯びた広がりが見られる。V層の上にのる。
d：黒褐色（10YR2/2）粘質土。III層と同じ土質であるが、V層の上にのる流路内の溜まり。
e：褐色（10YR4/4）砂質シルト。茶色みが強いが、わずかに灰色みを帯びる。1cm大の角のとれた小石を少量含む。
f：灰黄褐色（10YR4/2）砂質シルト。II-④層に比べ、III・IV層の5cm大のブロックが多く含まれる。2mm大の砂粒も多く含む。流路落ち方の溜まり。
g：褐灰色(10YR5/1)砂質土。均質な0.1mm前後の砂粒に、わずかに暗褐色（10YR3/3）シルトがラミナ状に混じる。流路落ち方の溜まり。

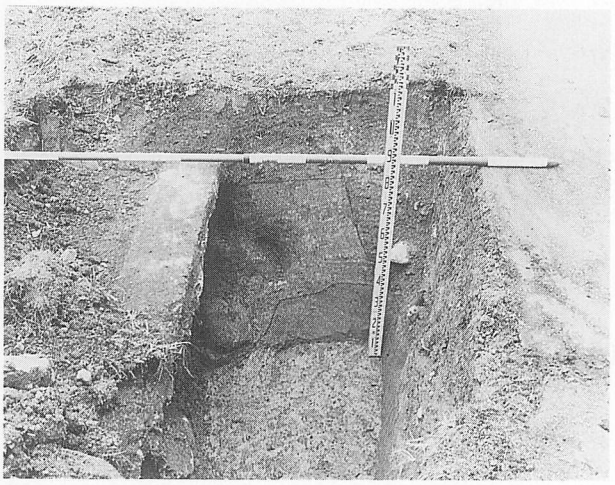
図57　99804調査1～9トレンチ土層断面図（縮尺1/40）

① 1トレンチ（東から）

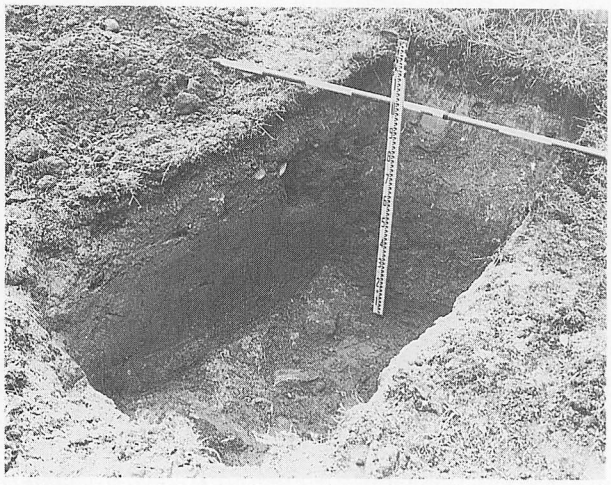


② 2トレンチ（東から）

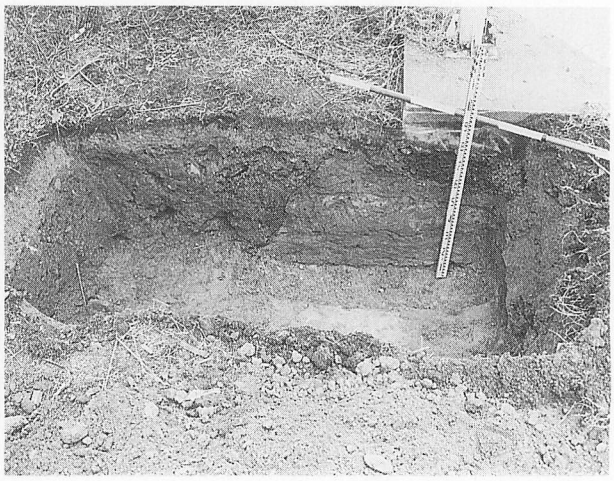
③ 3トレンチ（東から）



④ 4トレンチ（東から）

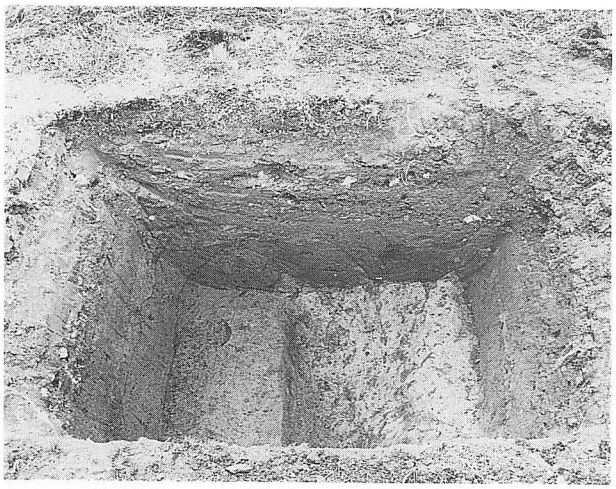


⑤ 5トレンチ（北東から）

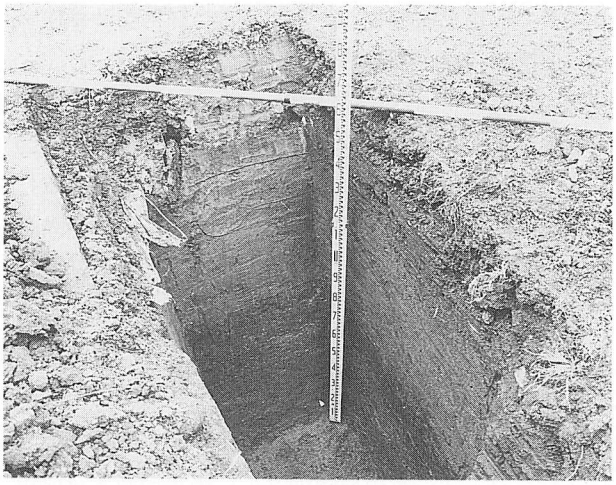


⑥ 6トレンチ（東から）

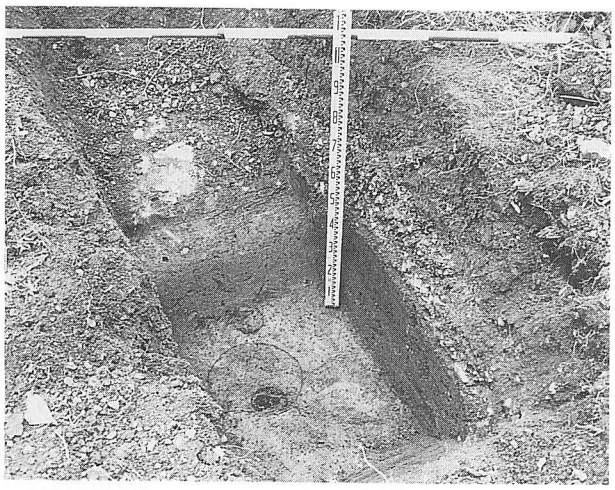
写真29　99804調査1～6トレンチ



① 7トレンチ（北から）



② 8トレンチ（北東から）



③ 9トレンチ（南東から）

写真30　99804調査7～9トレンチ

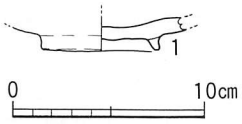


図58　99804調査出土遺物実測図1
（縮尺1/4）

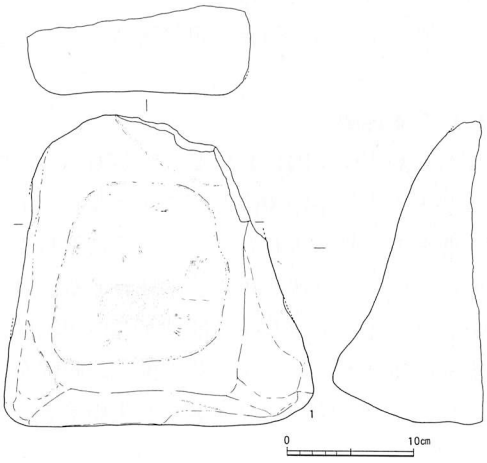


図59　99804調査出土遺物実測図2
（縮尺1/6）

その下でⅣ層を検出した。と同時に、柱穴を2基検出し、遺構の残存を確認できた。

3　調査のまとめ

以上の試掘結果に基づいて以下のように判断する。

東西道路部分は、まず既設管路によって遺跡が大きく破壊されている状況にはない。しかも、計画深度が260cmと深く、工事が遺跡に確実に及ぶこととなり、事前に全面調査が必要と判断できる。ただし、遺跡の性格としては、流路内の堆積である部分が多く、またⅣ層が残存する箇所についても、明確な包含層は認められない。ちょうど東西道路部分が、南に傾斜する流路斜面にほぼあたるのものと予測できよう。

実験施設本体部分に関しては、汚水処理施設本体の掘削深度が3m以上とかなり深いことが判明しており、試掘調査で確認した余掘り幅を含めて、発掘調査対象範囲から除外することが可能である。排水処理施設については、明確な本体に伴うと断定できる余掘りは確認できておらず、また、5トレンチで流路を確認しており、既設建物の下に、攪乱の及ばない遺跡の残存が予想される。したがって、排水処理施設自身の撤去完了後、発掘調査を行うことが適当であると判断する。なお、東西道路部分も含めて、遺跡の状況としては、先の附属農業高等学校校舎新営に伴う調査（樽味4次調査）で検出されたような自然流路跡が大半を占めると予測される。

南北道路の管路部分については、一部既往の調査（調査番号：99604）で、深さ70cm程度までならば、遺跡の影響が及ばないとも考えられたが、4トレンチ、9トレンチの状況から、計画深度でもⅣ層上面に残存する遺構に影響が及ぶ可能性が高い。あるいは包含層であるⅢ層が残存することも考えられる。南端部分でこのような状況であり、既往の調査（調査番号：98704、99101など）から遺跡の深度が浅くなる北側部分についても、当然遺跡に影響が及ぶこととなる。したがって、南北道路部分についても、事前の全面調査が必要と判断できる。

この他、農学部中庭、拓翠寮敷地内に関しても、計画深度による遺跡への影響が予想され、それぞれ事前の全面調査が必要と判断する。　（吉田）

99805　教育学部2号館南消火用水漏れ改修工事に伴う調査

調査地点　松山市文京町3番
　　城北団地
調査面積　3.0㎡
調査期間　1999年3月11日
調査の種別　立会調査
調査担当　田崎博之・吉田広
調査補助　宮崎直栄
依頼文書　平成11年3月11日付
　　教育学部事務長発　事務連絡

1　調査にいたる経緯

教育学部2号館南側道路において、水が噴出し、埋設している消火用水管路の損傷が明らかとなり、早急なる改修を要すると判断された。この工事に際して、埋蔵文化財については、既設用水管の埋設あるいは共同溝の設置に伴って攪乱が及ぶ可能性が高いが、周辺の状況が充分確認されておらず、その攪乱の範囲を特定するために、工事に際して立会調査を実施することとした。

2　調査の記録

まず漏水箇所周縁を広く掘削して、損傷した消火用水管並びに共同溝の位置を確認した。そしてこの範囲

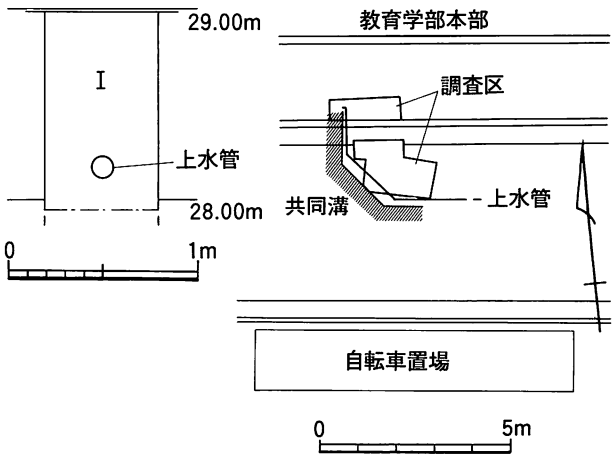


図60　99805調査地点および土層柱状図
（縮尺1/200、1/40）

においては、掘削深度内では、いずれも攪乱の及んでいることを確認できた(図60)。ただし、その攪乱が教育学部2号館建設時の余掘りによるのか、この破損用水管埋設時のものなのかは判断できなかった。

3　調査後の対応

以上の確認ができ、用水管の破損箇所も特定でき、これ以上掘削を進めないことになったので、以後の慎重工事を指示して、調査を終えた。　(吉田)

99806　理学部本館南消火栓管路改修工事に伴う調査

調査地点　松山市文京町2番5号
　　城北団地
調査面積　1㎡
調査期間　1999年3月16日
調査の種別　立会調査
調査担当　田崎博之
依頼文書　平成11年3月16日付
　　理学部事務長発　事務連絡文書

理学部本館と講義棟の道路で、消火栓用管路が漏水していることが理学部会計係から連絡され、緊急に立会調査を実施した。G.L.－0.4mで管路を掘り出し、漏水部分を確認できた。補修のためG.L.－47cmまで掘り下げたが、調査地点ではすべて造成土層であった(図61)。以上の確認を行った上で、以後の慎重工事を依頼して調査を終了した。　(田崎)

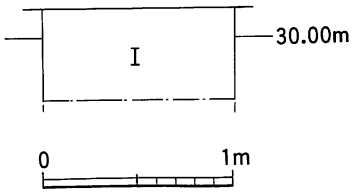


図61　99806調査土層柱状図（縮尺1/40）

99807　遺伝子実験施設新営その他工事に伴う調査（樽味遺跡5次調査）

調査地点　松山市樽味3丁目5番7号
　　樽味団地
調査面積　979㎡
調査期間　1999年3月16日～7月21日
調査の種別　本格調査
調査担当　吉田広
調査補助　宮崎直栄
依頼文書　平成10年12月25日付
　　遺伝子実験施設長発　事務連絡

1　調査にいたる経緯

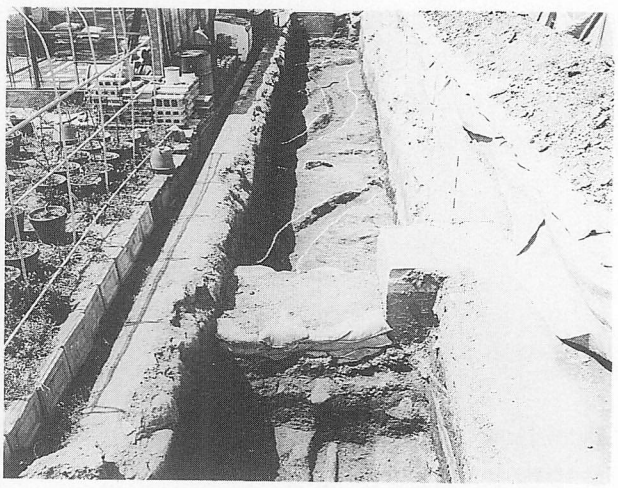
平成10年度補正予算に伴って、愛媛大学では樽味団地に遺伝子実験施設の新営を計画した。新営位置が従来調査の及んでいない地点であり、また伴う管路の新設も多いため、先に試掘調査（調査番号：99904）を行い、調査対象範囲の限定を行ったが、それでも調査範囲は広域に及ぶこととなり、とりわけ管路部分の総延長は500mを越える。

2　調査の概要

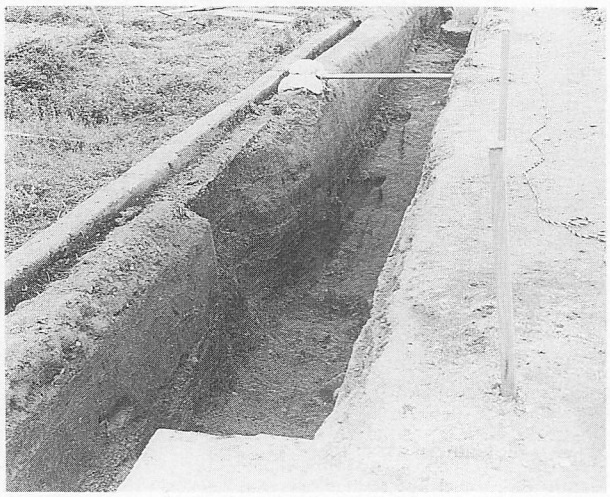
調査区は、遺伝子実験施設本体部分と、これに伴う新設管路部分からなり、今回の調査はとりわけその管路部分が長い。したがって、工程上からも各地区ごとに作業を終えていく必要があった。そこで、以下Ⅰ～Ⅵ区の調査区を設定し、調査を進めることとした(図62)。

Ⅰ区：遺伝子実験施設新営地点から西へ延びる下水管新設部分
Ⅱ区：遺伝子実験施設から北へ延びる電気管路部分と上水道管路部分で、前者は西、後者は東に平行しており、前者をⅡW区、後者をⅡE区とした。
Ⅲ区：遺伝子実験施設本体部分の内、汚水処理施設とRI実験施設の間。
Ⅳ区：遺伝子実験施設本体部分の内、汚水処理施設東の排水処理施設部分である。
Ⅴ区：電気管路部分の中で農学部校舎中庭部分
Ⅵ区：拓翠寮に新設される下水管部分

① Ⅰa区完掘状況（西から）



② Ⅰb区完掘状況（東から）



③ Ⅰd区完掘状況（東から）

④ Ⅰh区完掘状況（西から）

写真31　99807調査（樽味遺跡５次）Ⅰ区

以下、各区ごとに調査成果の概要を述べていこう。

(1) Ⅰ区の調査

遺伝子実験施設新営地点は、現行の汚水処理施設・排水処理施設を含み込むため、また松山市公共下水道への接続交換のため、新たな下水管の埋設が必要となった。これに伴う発掘区がⅠ区である。遺伝子実験施設新営地点北側から、既設集水枡（99507調査地点）までの170mに及び、このうち西部約40mは幅２mで、残る東側は幅１m前後となる。Ⅰ区の設定された未舗装道路部分では、既存の下水管や電気管で幅が制限されたり、あるいは既設枡によって発掘区が寸断された。そのため、これら寸断等によって発掘区を適宜分割し、西側からⅠa区～Ⅰi区とした。

発掘区の最西部では、包含層であるⅢ層が薄く、そしてすぐに地山層であるⅣ層が検出でき、若干の遺構も検出できた。これらの検出範囲は、幅の狭い発掘区の中でも北側に偏し、しかも幅を東に向かって減じる（写真31-①）。また、堆積土も、東に向かい流路（SR-１）内堆積（99804調査a～c層、および砂礫層）に交替する（写真31-②）。つまり、発掘区西端付近に流路北岸の一端が位置することになるのである。このような堆積は西端から東へ約73mほど続き、ここで再び発掘区南側からⅣ層が現れ、流路の南岸の一端となる（写真31-③）。ただし、この南岸を追えるのは10mほどに過ぎず、東は再び流路内堆積に転じる。そして再び安定した地山層であるⅣ層を検出できるのは、西端から約107mの地点、ちょうど動物飼育室南の道路交差点である。この流路際では住居跡らしき遺構（SC-11・12）も確認している。これより東では、流路本流とは異なる溜まりと見られる遺物を多数含む黒褐色シルト質土

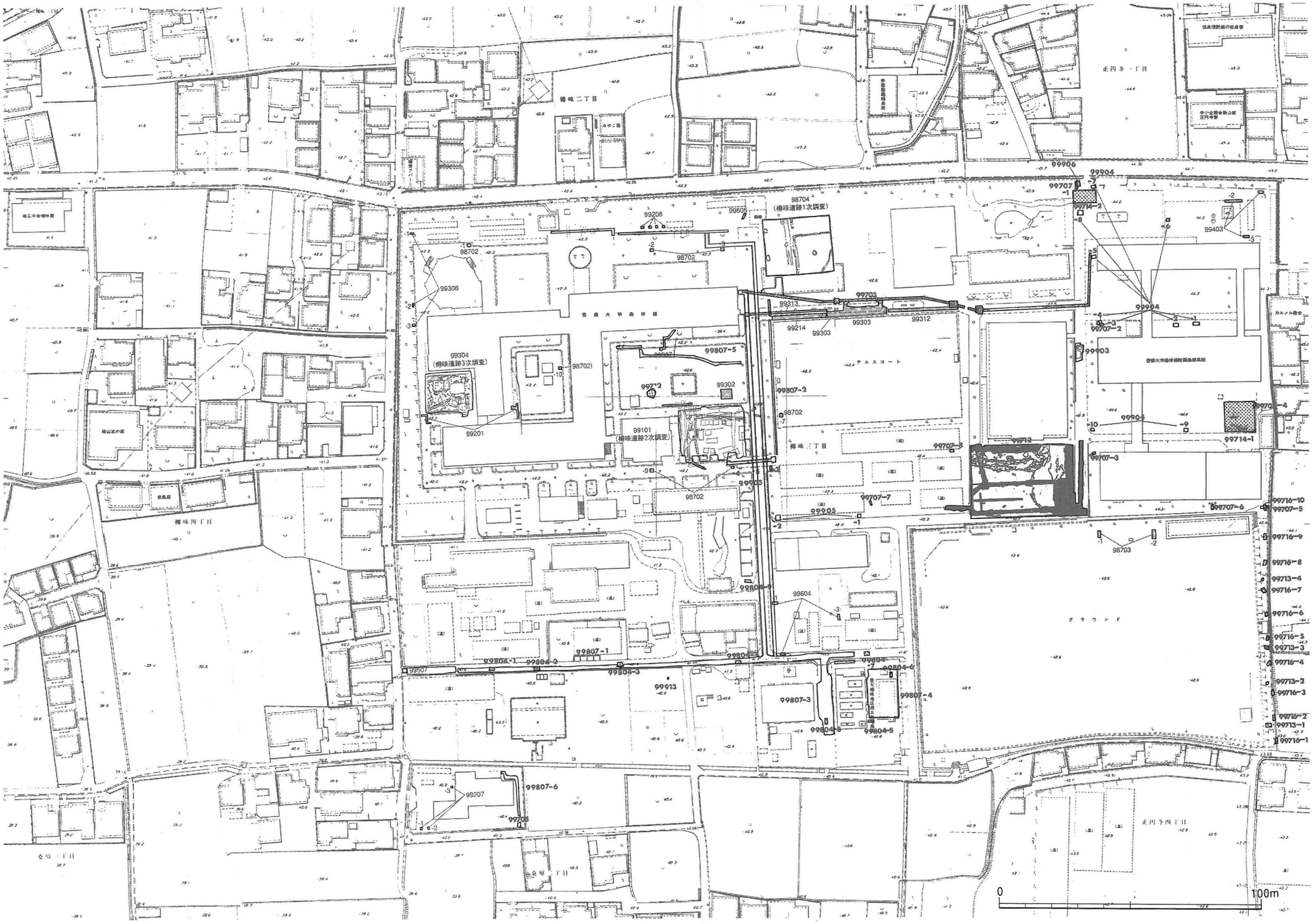
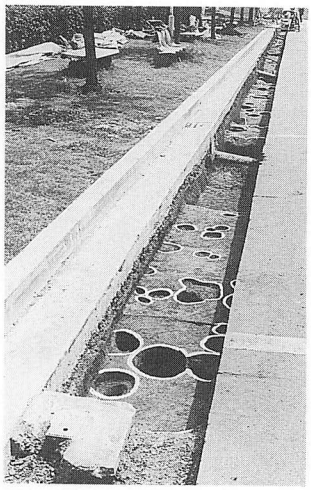
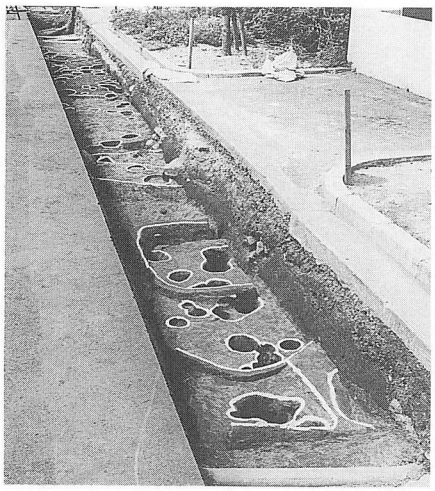


図62　樽味団地調査地点位置図（縮尺1/1,500）

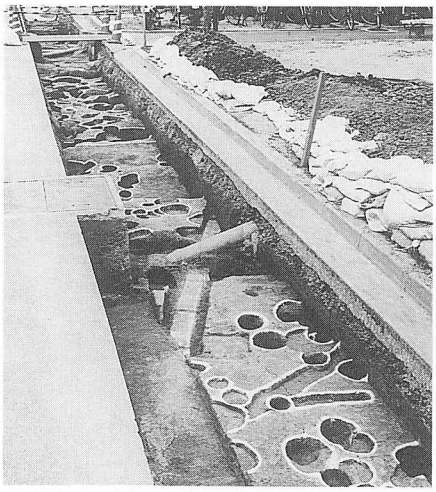
図63　99807調査（樽味遺跡５次）ⅡWe-f区、ⅡEe-f区周辺遺構配置図（縮尺1/200）



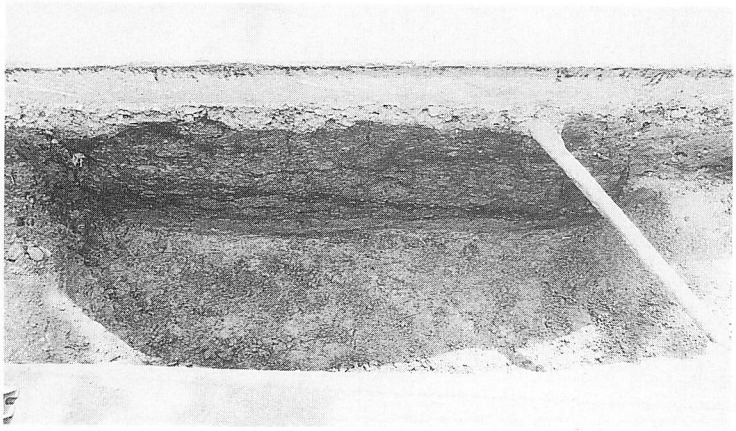
① ⅡEe-f区中世遺構（北から）



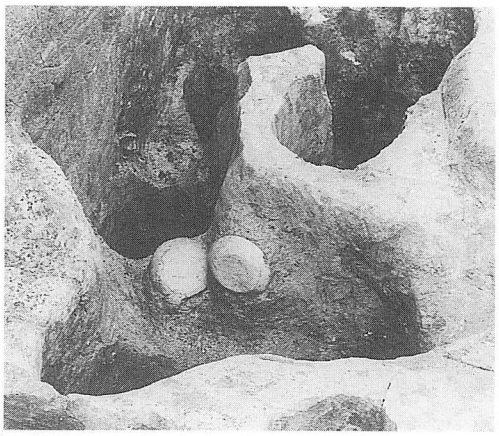
② ⅡWe区中世遺構（北から）



③ ⅡWf区中世遺構（北から）



④ ⅡEg区SK-38土層断面（西から）



⑤ ⅡWf区SP-452・454遺物出土状況（南から）

写真32　99807調査（樽味遺跡５次）Ⅱ区

の他は、基本的に安定した地山層をほぼ表土直下で検出している（写真31-④）。

(2)Ⅱ区の調査

新営される遺伝子実験施設への電気・上水の管路敷設に伴う発掘区で、樽味団地の南北道路に位置する。そのうち、西側電気管路に伴う調査区をⅡW区、東側上水管路に伴う調査区をⅡE区とした。ⅡW区は幅1.5mで、Ⅰ区との合流点から北に農学部本館北東角までの約141mに及び、ⅡE区は幅0.7mで、ⅡW区よりさらに北にのび、連合農学研究科棟西側でクランク状に曲がり、総長は約182mにも及ぶ。なお、両区ともハンドホールや既存管路で寸断され、そこで適宜小分割し、ともに南から、ⅡWa区～ⅡWg区、ⅡEa区～ⅡEk区とした。

ⅡW区・ⅡE区とも、南部60mほどは耕作土や既設管路によって攪乱を受け、わずかに遺構の一端が残るに過ぎない。対してそれ以北は、農高温室あたりから農学部研究実験棟（樽味遺跡２次調査地点）、テニスコート・中庭南半あたりまでは、良好な包含層を認めることができた。とりわけ、農学部研究実験棟東側では、上層の中世の遺物包含層だけでなく、下層により色調の濃い、加えて粘性も高い古墳・弥生時代の黒色粘質土も存在する。また、遺構も、狭い発掘区内に中世の土壙・溝・柱穴などが集中し、樽味遺跡２次調査地点の状況がさらに東にも及んでいることが明らかである（写真32-①～③、⑤）。ただし、このような状況も、中庭北半以北は攪乱が顕著であるのと、地山自体が高くなり、そのためかつては形成されていたはずの包含層が削られており、遺構の残りは良くない。それでも、ⅡE区のテニスコート北西コーナー付近で、攪乱され

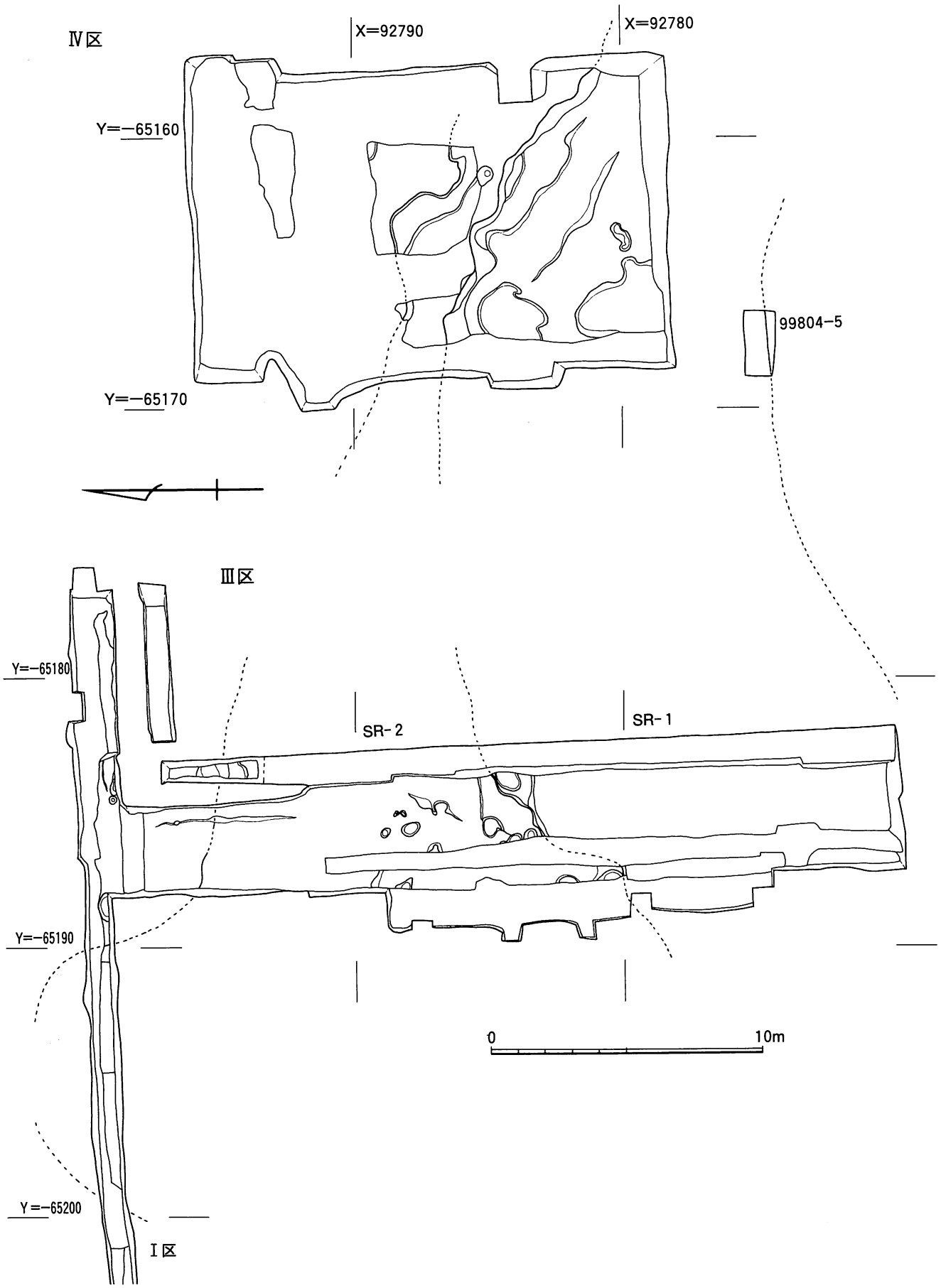
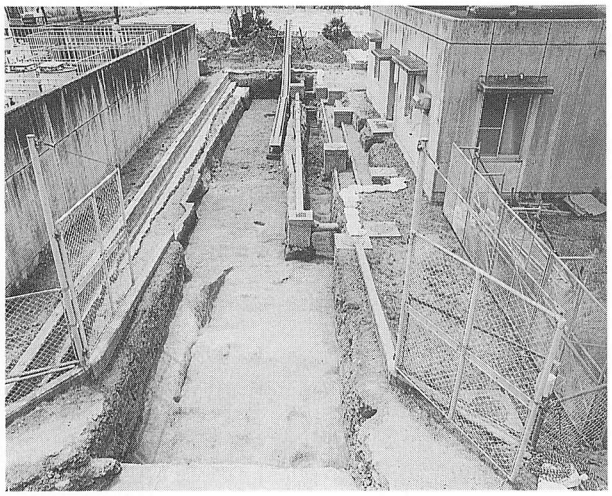
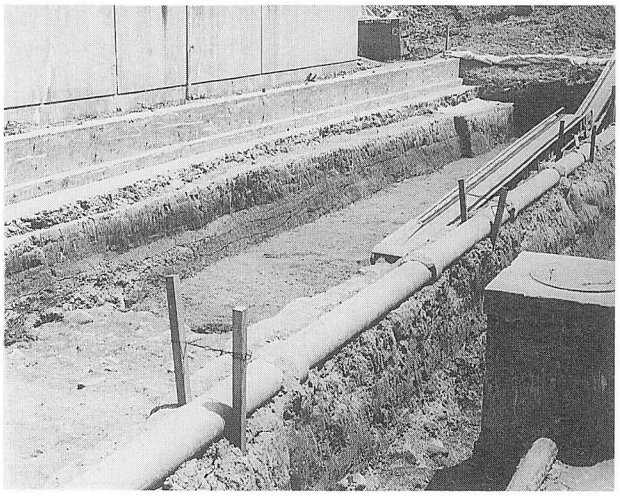


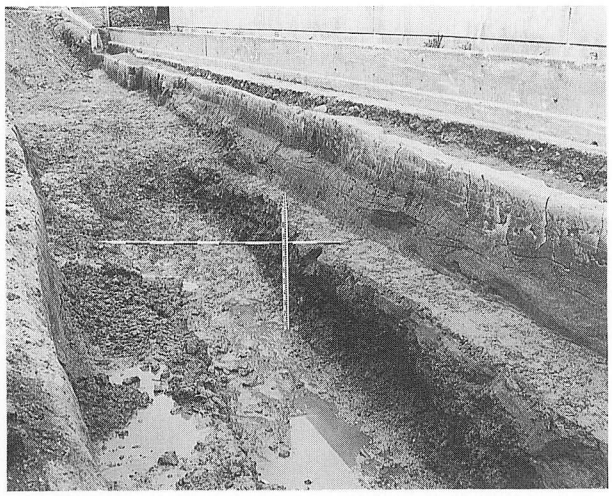
図64　99807調査（樽味遺跡５次）Ⅲ・Ⅳ区遺構配置図（縮尺1/200）



① Ⅲ区（調査途中、北から）

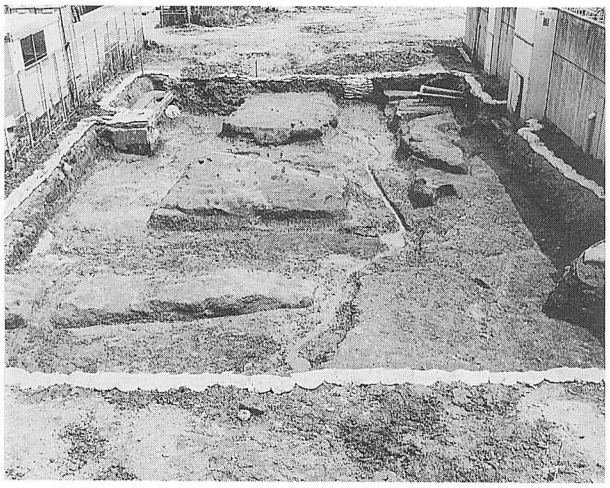


② Ⅲ区南半部（調査途中、北西から）

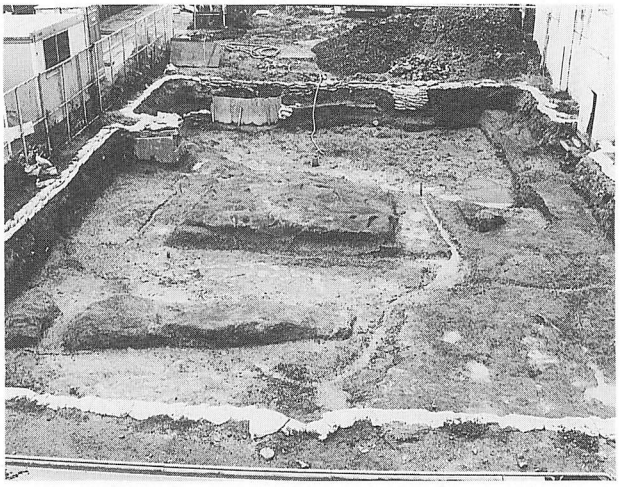


③ Ⅲ区中央部（調査最終段階、南西から）

④ Ⅲ区南端（調査最終段階、北西から）



⑤ Ⅳ区遺構検出状況（北から）



⑥ Ⅳ区完掘状況（北から）

写真33　99807調査（樽味遺跡５次）Ⅲ・Ⅳ区

た発掘区の壁に、フラスコ状土壙(SK-24)の断面を確認し、形状から弥生時代の貯蔵穴と推測される（写真32-④)。北の連合農学研究科棟（樽味遺跡１次調査）で確認された前期の遺構との関連が示唆されよう。

(3)Ⅲ区の調査

遺伝子実験施設新営地点の内、汚水処理施設西側、RI実験施設との間の東西５m強・南北約30mほどの発掘区である（図64)。

北端は表土下すぐに地山が検出され、一部範囲にはⅠ区東寄りで確認されたSR-２の黒褐色シルト質土の堆積が認められた。一方、この調査区南半はさらに深い流路を形成し、砂礫を交えた堆積となり、これがⅠ区で蛇行しながらも検出された流路SR-１の本流にあたる。ただし、SR-１の南岸は、このⅢ区内では検出できていない（写真33-①、②)。

狭く細長い発掘区であり、流路内堆積のための湧水と、東側に深く掘削された汚水処理施設があるため、人力による掘削は危険が生じてきたため、流路内堆積の掘削は途中で停止し、最後に重機による掘削によって土層の確認を行った（写真33-③、④)。

(4)Ⅳ区の調査

遺伝子実験施設新営地点の内、汚水処理施設東側、排水処理施設を解体した後に設定された調査区である（図64)。東西約13m・南北18mを測る。やはりⅢ区で検出されたSR-１・２の北岸がここでも検出できた(写真33-⑤)。ともに北西－南東方向に傾き、しかもSR-１北岸は、Ⅲ区での検出地点よりかなり南によっており、蛇行する流路の様子がよく分かる（写真33-⑥)。なおこのSR-１の南岸の一部は、99804調査５トレンチにおいて検出されたものが該当しよう。

(5)Ⅴ区の調査

電気管路に関して、農学部校舎東側中庭に設定された発掘区である。植栽と既存管路の多い中庭のため、直線的に発掘区を設定することができず、かなり曲折した発掘区となった。それでも、幅0.7m・総長56mに及ぶ。また、既存管路などで分断された毎に、Ⅴa区～Ⅴf区に小分割している。

Ⅴ区の西より、クランク状の付近では、中世の柱穴が若干認められる他に、黒色～黒褐色の粘質土を埋土とする、弥生時代と推定される住居跡の一部(SC-16・17・18・20)や、溝(SD-15)を検出している(写真34-①)。一方、Ⅴ区中央付近では、既に弥生時代の黒色～黒褐色粘質土は認められず、いずれも中世の遺構となる。樽味遺跡２次調査で検出された南北方向の溝SD-１に連なる、溝(SD-19)などが認められた。なお東寄りでは、わずかに柱穴などを確認するにとどまる（写真34-②)。

(6)Ⅵ区の調査

先のⅠ区同様、拓翠寮に関しても公共下水道への下水道切り替えが必要となり、拓翠寮の北側から東側にかけて、南端は99708調査地点に達する、幅0.7m・総長約28mの発掘区である。

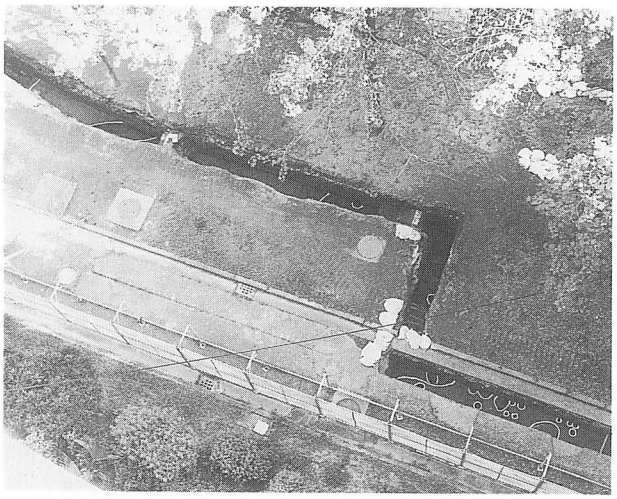
現地表下40～50cmでⅡ層直下のⅣ層に達し、遺物包含層は認められない（写真34-③)。またそのⅣ層も、およそ20cmほどの厚さで、以下はⅤ層となる。唯一、拓翠寮北側部分で、浅い流路内堆積(SR-21)を認めた（写真34-④)。

3　調査のまとめ

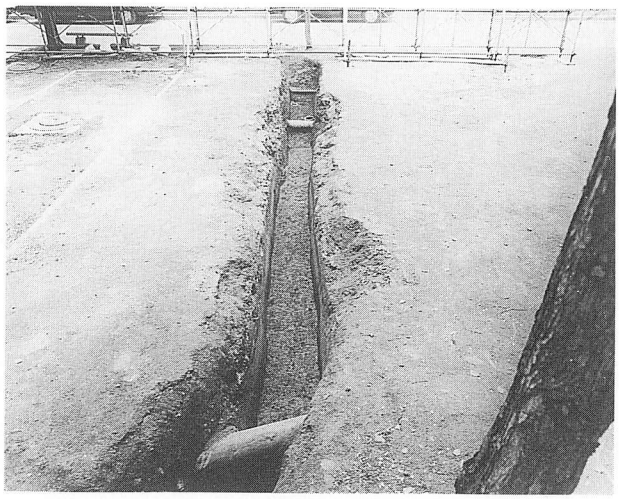
今回の調査は、樽味団地に対して大きくトレンチをいれる格好となった。したがって、面的に集落の様相を明らかにすることはできなかったが、代わりに旧地形や遺跡の広がりを把握することができた。

まず、これまでほとんど調査の及んでいなかった樽味団地南半部について、Ⅰ区とした道路をほぼ北岸に、若干蛇行しながら流れる中世の流路の存在を明らかにできた。同様の流路は、Ⅵ区とした拓翠寮北側でも見つかっており、樽味団地西側での松山市調査による樽味四反地遺跡１次調査検出の流路とも併せ考えれば、現在の実験農場一帯が、東西方向の幅広の流路帯とでも言える様相を呈していた可能性が高い。またさらには、東側の附属農業高等学校校舎新営地点（樽味遺跡４次調査）で確認された南北方向流路との関係も留意する必要がある。

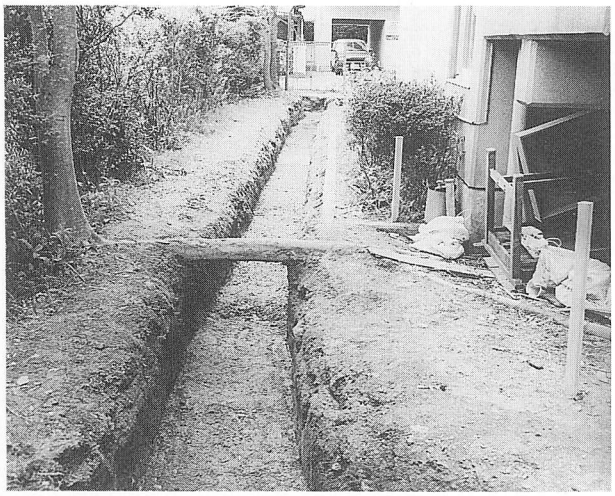
一方、Ⅱ・Ⅴ区の調査では、中世と弥生～古墳時代の遺跡の広がりをおよそ確認できた。それによると、農高温室以南は、耕作土等によって攪乱が著しく、包含層・遺構とも残存状況は良好でない。対して、それ以北、中庭・テニスコート付近までは中世の遺構が良好に残存しており、樽味遺跡２次調査で確認された中世集落がさらに広がることを予測できる。なお弥生～古墳時代の包含層も、この付近で一部確認されており、遺構も中庭西寄りで住居跡と溝、テニスコート北西付近で貯蔵穴を確認している。樽味遺跡１次調査での成果とともに、樽味遺跡における弥生前期集落の展開を考える上で、貴重な資料を追加できた。（吉田）



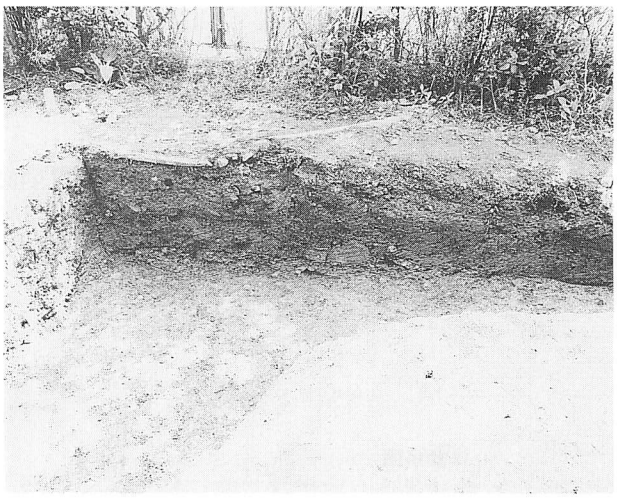
① Ⅴa～d区完掘状況（北西から）



② Ⅴf区完掘状況（西から）



③ Ⅵb区完掘状況（北から）



④ Ⅵa区SR-21（西から）

写真34　99807調査（樽味遺跡５次）Ⅴ・Ⅵ区

99808　医学部附属病院病棟建設に伴う調査

調査地点　温泉郡重信町大字志津川
　　重信団地
調査面積　2.5㎡
調査期間　1998年３月31日～４月１日
調査の種別　試掘調査
調査担当　田崎博之・三吉秀充
依頼文書　平成11年３月15日付
　　医学部長発　事務連絡

1　調査にいたる経緯

医学部附属病院病棟の建設計画が３月上旬に埋蔵文化財調査室に提示された。当該地点の南側には99210調査地点があるが、調査範囲が狭いため埋蔵文化財の有無は判断できていない状況であり、その有無を試掘調査によって確認することが必要と考えられた。ところが、埋蔵文化財調査室は、総合情報処理センター建設に伴う文京遺跡18次調査、農学部遺伝子実験施設新営に伴う樽味遺跡５次調査の発掘調査中であり、いずれかを中断して試掘調査を行わなければならず、場合によっては調査工程に支障となることも考えられた。そこで、施設部と調査方法や日程などの調整を行い、ようやく試掘調査を実施することとなった。

2　調査の記録

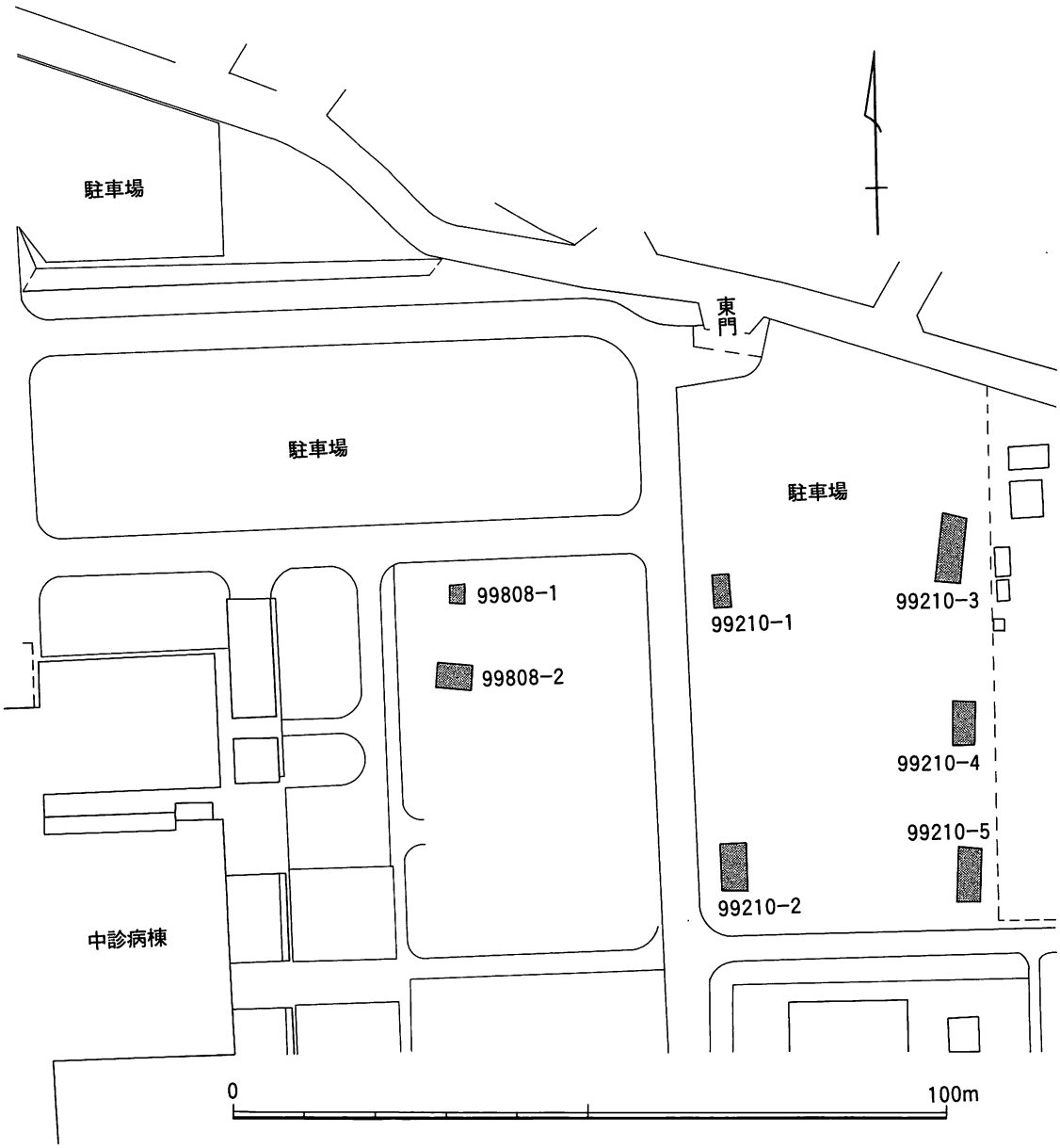


図65　99808調査１・２トレンチ配置図（縮尺1/1,000）

調査では植栽を避けて調査地点の西半部に１トレンチを設定した。しかし、G.L.-1.9mで撒水管の埋設が確認され、それ以上掘り下げることができず、やむなく東側に10mほど離れて２トレンチを設定して調査を継続した。

２トレンチでは、G.L.-2.6mまで客土された真砂土、造成で攪乱された円礫層が続く。これら客土・造成部分を①層とした。G.L.-2.6～4.45mまでは、暗灰色砂質土・粗砂・小礫を多く含む人頭大～拳大の円礫層である。とくにG.L.-３m以下はかなり湿った状態であった。また、G.L.-4.45～4.9mには、砂礫をほとんど含まない黄褐色シルト層があらわれ、以下は粗砂・細砂・小礫の薄いレンズ状ブロックを縞状の互層状態で挟む人頭大～拳大の円礫層がつづく。これらを②層として一括し、上位の円礫層を②-１層、中位の黄褐色シルト層を②-２層、下位の円礫層を②-３層とした。②層は、重信団地が位置する重信川が造る扇状地を構成する礫層と考えられる。また、１・２トレンチともに、遺物は出土していない。

隣接する99210調査地点では、①層に対応する真砂土・造成層の下層では近代の水田層が確認されているが、今回の調査地点では、そうした水田層さえ確認で

きず、真砂土・造成層の直下は②層の円礫層である。遺物も出土していないことからも、病棟建設予定地は、埋蔵文化財があっても、医学部敷地の造成によってすでに破壊されているものと判断した。

3　調査にかかわる問題点

埋蔵文化財調査室では、1998年12月中旬から総合情報処理センター建設に伴う文京遺跡18次調査、1999年3月中旬から農学部遺伝子実験施設新営に伴う樽味遺跡5次調査の発掘調査中である。そのため、立会・試掘調査は、緊急の場合を除いて3月～6月は実施できない状況で、両調査が終了する1999年7月以降に実施する計画であった。

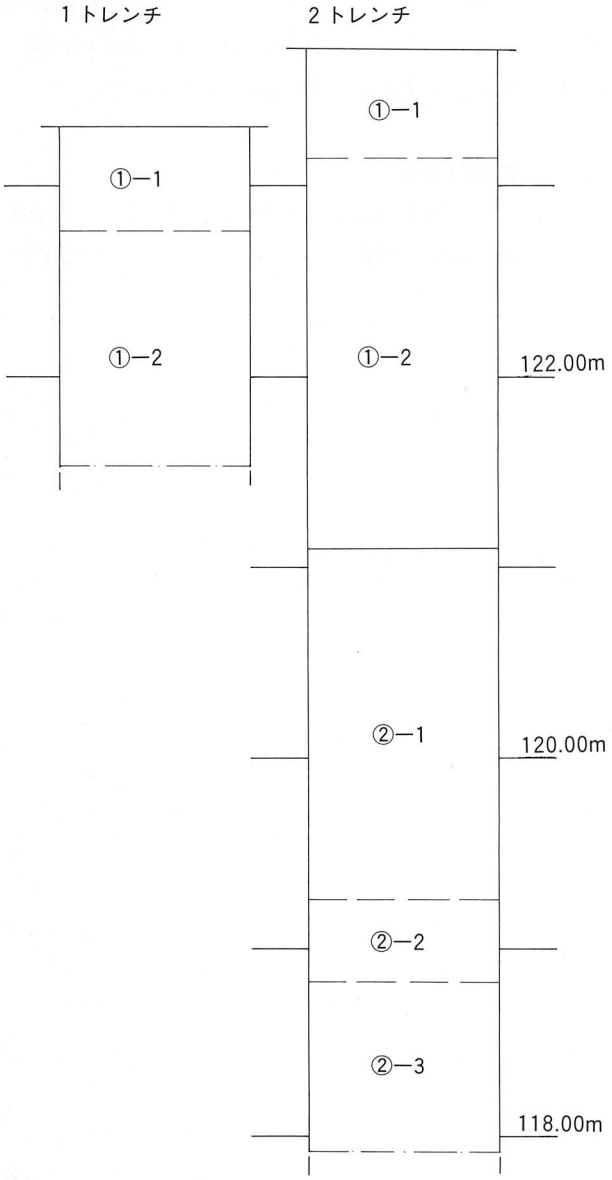
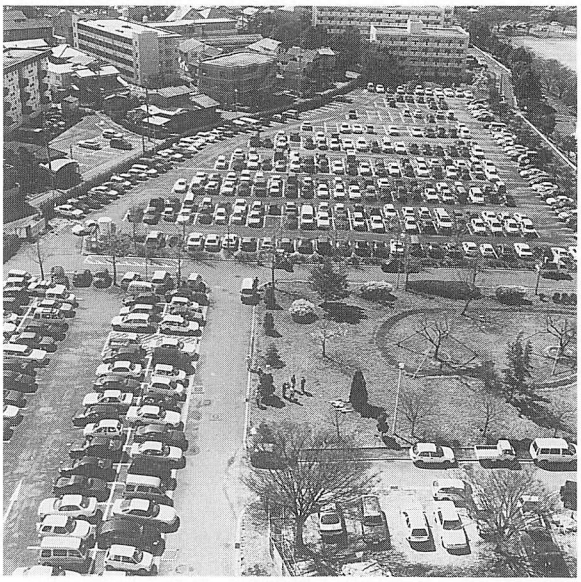


図66　99808調査土層柱状図（縮尺1/40）

ところが、今回の附属病院病棟の建設予定地は昨年中に決定されていたにもかかわらず、建設計画が埋蔵文化財調査室に提示されたのは3月上旬であった。そのため、試掘調査は限られた方法や日程で行わねばな



①　調査地点遠景

②　2トレンチ土層断面

写真35　99808調査地点遠景・土層断面

らず、また調査を行った田崎・三吉が担当している総合情報処理センター建設に伴う文京遺跡18次調査の発掘工程の調整も必要となってしまった。

これまで施設建設にあたっては、建設計画がたてられ建設予定地が決定される前後に、施設部から埋蔵文化財調査室へ計画が提示され、試掘調査などを実施する必要があるかを判断してきた。今回、そうした連絡調整が一切なかった点は解決されるべき問題点である。（田崎）

99809　学生会館ガス管改修工事に伴う調査

調査地点　松山市文京町3番
　　城北団地
調査面積　1㎡
調査期間　1998年6月3日
調査の種別　立会調査
調査担当　吉田広

1　調査にいたる経緯

学生会館南側のガス管にガス漏れが生じたため急遽改修を行うこととなり、掘削が行われていた。ところが、この工事に関する通知は埋蔵文化財調査室に届いておらず、たまたま現地を吉田が1998年6月3日に確認し、急遽現状の確認を行った。

2　調査の記録

吉田が確認した時点で、掘削深度は現地表下40cmから最大で90cmに及んでいた。ただしいずれも瓦礫を伴ったⅠ層で、学生会館建設に伴う余掘り内と判断できた。掘削排土中からの遺物出土もなかった。

3　調査後の対応

これ以下の掘削は行わないとのことであり、以後の慎重工事を現場で依頼した。（吉田）

愛媛大学埋蔵文化財調査室年報

―― 1997・1998年度 ――

愛媛大学埋蔵文化財調査報告　VIII

2002年３月29日

発　行　愛媛大学埋蔵文化財調査室
〒790-8577　松山市道後樋又10―13
TEL 089-927-9127

印　刷　セ　キ　株　式　会　社
〒790-8686　松山市湊町７―７―１
TEL 089-945-0112

R100 本文には古紙配合率100%の再生紙を使用しています。